課題探究プロジェクト（Ⅰ・Ⅱ・ⅢA・ⅢB）
グローバルアプローチ

2019年4月～2020年2月

活動成果報告書

福井大学国際地域学部

目　次

はじめに…… 1

課題探求プロジェクトⅠ
（２年次前期：グローバルアプローチ）…… 3

課題探求プロジェクトⅢ A ／Ⅲ C
（３年次前期：グローバルアプローチ）…… 18

課題探求プロジェクトⅡ／課題探求プロジェクトⅢ B
（２年次後期／３年次後期：グローバルアプローチ）…… 36

おわりに…… 55

はじめに

四年前に旧教育地域科学部の地域科学課程を発展解消させるかたちで設けられた国際地域学部は、今年度を以て学部としての完成年度を迎え、初めての卒業生を送り出すことになりました。記念すべき本学部第一期生の船出は、いきなり新型コロナ・ウィルスという予期せぬ高波に見舞われることになりましたが、国際通用性を備えた特徴的なカリキュラムによる四年間の学びの成果が羅針盤となり、彼らを目的地へと導いてくれることでしょう。

福井大学第四の学部として発足した国際地域学部のカリキュラムを、交換留学を見据えた初年次の英語集中履修プログラムと並んで特徴づけているのが、学部の基幹科目として1年次から3年次（4年次）にかけて設けられた一連の課題探究プロジェクト科目です。Project Based Learningの頭文字をとってPBLとも称される同科目は、「地域や国際社会が抱える諸課題の探究と解決に能動的に取組む科目」であり、本学部の履修手引きでは、「実践的な事例研究やワークショップ等を含むプロジェクト学習を継続的に深めながら、専門学問分野の知識と方法を修得」することが、その目的として謳われています。

近年、大学教育におけるアクティブ・ラーニングの重要性が盛んに唱えられ、それを実現するための授業形態として、多くの大学・学部がPBLを授業に取り入れるようになりました。今や教育界の時代のトレンドとなった観すらあるPBLは、文系・理系を問わず幅広い分野で実践されていますが、「実践的な事例研究やワークショップ等を含むプロジェクト学習」がなじむ分野となじまない分野があることは否定できません。学際的な研究が広まり、学問分野を単純に分けることができない時代になりましたが、文系の分野でいえば、PBLとの相性という点で社会科学が人文科学よりも勝っていることは、本学部のケースを見ても明らかでしょう。

1年次後期に開講される「基礎」、2年次生を対象にした「Ⅰ（前期）、Ⅱ（後期）」、3年次生が取り組む「ⅢA（前期）、ⅢB（後期）」、それに3年次に留学した学生の便宜を図るために4年次に設けられた「ⅢC」も含めて、学外の諸団体との協働で実施される一連のPBLは、いずれも複数のプロジェクトから構成されています。学生は各自の興味に応じて取り組むプロジェクトを選択することになりますが、現在、地域創生アプローチの学生を対象に実施されている二桁に上る数のプロジェクトは、企業や自治体での研修を軸に据えたものが大半を占め、総じて社会科学的な性格が顕著に見て取れます。他方、グローバルアプローチの学生向けに当初より設けられていたプロジェクトは、英語を使って実施される点に特徴がありますが、地域の企業や学校現場をフィールドとする活動内容それ自体は、やはり社会科学の範疇に含まれると言ってよいでしょう。

このように、その性格上致し方ないことなのかもしれませんが、本学部で実施されているPBLの内容は社会科学一辺倒であり、グローバルアプローチの学生には、当初、プロジェクトを選択する余地すらありませんでした。こうした状況に鑑み、欧米や中国の文学、言語、文化を専門とする教員が協力して人文科学的な性格を持つプロジェクトを立ち上げたのは、かれこれ二年前のことになります。それ以来、「Ⅰ（2年次前期）」のプロジェクトでは、毎年10月に開催される福井国際フェスティバルにブース出展者として、さらには運営スタッフとして参画する取り組みが継続して実施されてきました。こうした「Ⅰ（2年次前期）」が教育地域科学部時代の地域課題ワークショップ科目を継承したものであるのに対して、「Ⅱ（2年次後期）」及び「ⅢA（3年次前期）、ⅢB（3年次後期）、ⅢC（4年次前期）」のプロジェクトは、いずれも新規の取り組みであり、映画の自主上映会の企画・開催を通じた地域振興を共通の目的としています。

映画は、かつて「第七芸術」と呼ばれたこともあり、芸術・文化として捉えることができますが、他の諸芸術との顕著な違いは、産業的・商業的な側面を色濃く持ち合わせている点にあります。したがって、映画に対しては人文科学的なアプローチのみならず、社会科学的なアプローチも可能なのであり、その点において、映画というテーマはPBLの趣旨になじむものであると言えるでしょう。「ⅢA」では、二年続けて野外上映会を開催しました。福井城址隣の市民の憩いの場である中央公園を会場とするクラシックな名画の上映会が、ゆくゆくは福井市の初夏の風物詩として根付くことを期待せずにはいられません。合同クラスで実施されている「Ⅱ」と「ⅢB」では、今年度、初めての試みとして、福井県立図書館において、同館との共催で近作映画の自主上映会を開催しました。人文科学的な性格を持つプロジェクトを構想する場合、その連携先として図書館ほど相応しい施設はないと言っても過言ではありません。今回のプロジェクトが、さまざまな可能性を秘めた大学と公立図書館との緊密な連携の嚆矢となることが期待されます。

これら三つのプロジェクトの詳細につきましては、学生たちの言葉で紡がれた本報告書の次頁以降の記述をお読みいただくとともに、皆様の忌憚のないご意見・ご感想を賜ることができれば、幸いに存じます。最後になりましたが、「Ⅰ」では十年以上もの長期にわたり学生たちを温かく受け入れてくださっている福井県国際交流協会の皆様に、「ⅢA」の野外上映会の開催を陰になり日向になり支えてくださった(株)ムービーマネジメントカンパニー、(有)スペース源内、福井市役所公園課、福井大学工学研究科明石研究室の皆様方に、そして上映会と学生によるトークセッションから成る「Ⅱ・ⅢB」のイベントの実現に宣伝・広報面においても多大なご協力をいただいた福井県立図書館の皆様に、担当教員一同、心より御礼を申し上げます。

2020年3月　　担当教員一同

課題探求プロジェクトⅠ

（2年次前期：グローバルアプローチ）

国際地域学部　2年
粟田　皓大
蔵　まりな
新保　彩奈
高本　康平
中村　文香
西本　未翔

目次

1．プロジェクトの構成と概要
2．受講生による報告
　【1】活動内容
　【2】活動の成果
　【3】かるた企画について
　【4】総括
3．課題探求プロジェクトの成果
4．総括・反省

１．　プロジェクトの構成と概要

１）授業のアウトライン

地域課題の発見と解決に取り組み、その成果を福井県国際交流協会が主催する「福井国際フェスティバル」のなかで企画展示として発表し、同協会にて実習も行った。その活動は次の二点に大別される。

① 授業時の活動は、大学およびヒアリングのために学外（福井県国際交流協会）で行った。

② 授業時の活動と並行して、6 月以降、福井県国際交流協会が催す会議等に出席し、国際的催事のための企画・運営を担当した。

同フェスティバルは福井県内で外国人と地域住民が交流する催しとして毎年秋に福井県国際交流会館において行われており、2019 年で 23 回目の開催となる。毎年の来場者数は約 5,000 名である。

２）授業の進行

課題探求プロジェクトⅠ	福井県国際交流会館での実習
第 1 回　2019 年 4 月 10 日	企画運営委員会（第 1 回）　2019 年 6 月 30 日
第 2 回　2019 年 4 月 24 日	企画運営委員会（第 2 回）　2019 年 7 月 7 日
第 3 回　2019 年 5 月 8 日	企画運営委員会（第 3 回）　2019 年 7 月 14 日
第 4 回　2019 年 5 月 22 日	企画運営委員会（第 4 回）　2019 年 7 月 21 日
第 5 回　2019 年 6 月 5 日（国際交流会館にてヒアリング）	企画運営委員会（第 5 回）2019 年 8 月 4 日
第 6 回　2019 年 6 月 12 日	企画運営委員会（第 6 回）2019 年 9 月 8 日
第 7 回　2019 年 7 月 3 日	企画運営委員会（第 7 回）2019 年 10 月 6 日
第 8 回　2019 年 7 月 25 日	福井国際フェスティバル前日準備（26 日）、本番　2019 年 10 月 27 日
反省会、成果報告　2019 年 10 月 30 日	企画運営委員会（第 8 回）2019 年 11 月 24 日

３）授業の目的

① 福井や地域社会における外国人の現状を理解し、とりわけ文化と言語の観点から、課題の発見と探究に当たる。

② 学生が主体となってヒアリング調査等を行い、地域住民や外国人との協働のあり方を学ぶ。

③ 地域社会をグローバルな視点で複眼的に眺める姿勢を身につける。

④ 国際的催事にスタッフとして参加することにより、地域住民や外国人と交流し、実践的なコミュニケーション能力を養う。

２． 受講生による報告

【1】活動内容

◆授業での活動：

（A） 授業での活動は、フェスティバルの目的を理解し、自分たちがどのようにその行事に関わっていくかという話し合いからスタートした。まず、このフェスティバルは毎年行われていて、福井大学の PBL の一環として先輩たちは毎年このフェスティバルに貢献してきた。私たち６人のうち、これまで誰もこの行事に参加したことはなく、存在すら知らなかったため、この行事の基本的な目的やコンセプトを掴むのに少し時間がかかった。ターゲットとしては子連れの家族や外国人が多いということで、大人も子供も楽しめるレクレーションを考えることにした。フェスティバルの目標が国際交流をより幅広く展開し、多くの人にその機会を設けることであったため、楽しく遊びつつ、福井のことや世界のことに関心が深まるイベントを作ろうということになった。そこでいくつか案を出し合い、予算や実現可能性、目的からそれていないか、などを考慮しながらアイディアを絞って行き、最終的にはランキングかるたという遊びを自分たちで作ることにした。それからの活動は、話し合いではなく本格的な作業に移っていった。まず、なんのランキングにするか、何枚くらいを目安に作成するか、ランキングの種類はどんなものにするか、どれくらいの大きさでかるたを作るかなど、作業をしていく上で必要な詳細を決め、かるた作成に時間を費やした。かるたの素材も分厚目の画用紙でも良かったのだが、子供たちは乱暴に扱う可能性があるため、ある程度耐久性のあるものにしようということで普通紙をラミネートして仕上げることにした。そして下書きから清書、色ぬり、読み札の作成を済ませ、あとは何度か自分たちで出来上がったかるたで遊んでみて、その都度反省点を話し合い、時間調整などをして最終的な仕上げをした。

（B）授業では、まず自分たちが国際フェスティバルで何をするかを考えた。この時に意識したことは、国際フェスティバルに来る参加者のニーズに応えるということである。例年、子ども連れの家族が多く参加すると聞いていたので、小さい子でも楽しめて、さ

らには福井のことを学べる何かをやろうと話し合った。しかし、子供がやって盛り上がるものを考えても最初は何も出てこなかった。そこで、国際フェスティバルなので日本の文化的な要素を取り入れる必要があるという話にもなった。それらの条件を満たしているものを考えていたら福井に関するカルタをやろうという結論にたどり着いた。授業中にどのようなカルタにするかを決め、そのカルタの制作を行った。カルタの内容は福井のランキングカルタになった。各々福井の様々なランキングを調べ、紙に手書きの絵を描き、それをラッピングして読み札を作った。授業では以上のことを行った。

（C）授業ではまず何を国際フェスティバルで行うのかみんなで話し合った。企画を考えるにあたってどの層をターゲットにするのか議論した。これまでの国際フェスティバル来場者の傾向をみると子どもの割合が多いことから、子どもをターゲットに企画を考えた。話し合った結果、かるたを使って、福井のことを知ってもらおう、そして再確認してもらおうということになった。また子供だけでなく外国人の方にもかるたを通して福井のことを知ってもらうのも狙いであった。子どもが好きなかるたであれば、楽しんで福井のことについて知ってもらえると考えた。そして、特に上位と下位をピックアップした全国の中での福井のランキングに関するかるたで福井のことについて学んでもらうことにした。月に 2 回しか授業がないこともあり、作業時間はあまり余裕がなかったように感じた。しかし少人数ということもあり、みんなが意見を出し合ってより良いかるたを完成させることができたと思う。

◆国際交流会館での活動：

（A）国際交流会館での活動としては、まず国際交流フェスティバルの中でどういう催し物をするかを決め、自分が所属したい階を決め、その階で行われる催し物のどれを担当したいかなどを決定した。そして、自分の担当が決まった後は、それぞれの部会の人たちと議論しながら、それぞれの催し物の準備を進めていった。私は今回 2 階部会の「世界の遊び」という催しを担当した。これは、フェスティバルの国際的な文化の学びや体験を通して体感してもらう、という趣旨のもとに世界各国の遊びを紹介して実際に体験してもらう、というものであり、私たちが作成したかるたもこのプログラムの遊びの一つとして組み込まれていた。私たちの仕事は、フェスティバルの前日準備までに、どの遊びをするのか、どういうタイムテーブルで遊びを行うか、当日のボランティアの方々の役割分担などを決定し、前日準備では当日の部屋や会館の装飾の制作、遊びのリハーサルを行い、本番は実際に来場者を集めて遊びを紹介し、時に一緒に参加しながら自分の担当の責任者として活動した。

（B）毎月定期的に国際フェスティバル運営委員会で集まって会議を行った。最初は全体で、フェスティバルのテーマについて話し合い、目的に沿ったスローガンを決めた。

その後 3 グループほどに分かれてフェスティバルの出し物について意見しあった。出し物やタイムスケジュールなどが大まかに決まってからは、所属部会を決め、部会ごとに集まって今後の流れを確認し、空き時間にどのような出し物を入れるかを話し合い、催しごとの具体的な実施時間や経費、人材確保について確認した。ボランティアスタッフが加わってからは当日に向けて、リハーサルや出し物の配置、機材の確認を行った。当日は自分の持ち場で来場者の方と触れ合い、様々な意見をいただいて、改善していき、休み時間にはほかの部会の催しを体験した。また、かるたの開催時間には持ち場を離れて見学に行き、実際にどのようにしてかるたが行われているか見ることができた。読み手として参加して、子供たちが楽しそうにしている様子を見ることもできた。フェスティバルの閉会式では全員で一体となって楽しめる催しがステージで行われ、参加者だけでなく運営側も楽しむことができた。フェスティバル終了後は写真撮影を行いボランティアも含めて私たち自身もみんなで楽しむことができたフェスティバルとなった。

（C）国際交流会館では、まず初めにテーマ決めと大まかにどのようなことがしたいかを全員で考えた。それらが決まった後はそれぞれ部会に分かれて活動した。私は、日本文化体験ができる部会で活動した。ここでは、参加者にどんな日本文化を体験してほしいかを考えた。形に残るものが良いという意見も出たので、折り紙、書道をやることになった。盛り上がることもやりたいとなったので少しは笑いが起きそうな福笑いをすることになった。準備として、折り紙はお手本、折り方の解説用紙作りを行った。書道は筆、半紙のセッティングを行った。福笑いは作ってきていただいたので何もしていない。折り紙と書道は持ち帰るか、展示してもらうかにした。折り紙は模造紙に海、平原、木を描いて作ってもらった折り紙を好きな場所に張ってもらい参加者で一つの作品をつくってもらうようにした。書道は学校の教室のような展示の仕方にした。国際フェスティバル当日は、基本的には、呼び込みと子供の折り紙を折る手伝いをした。

（D）今年度は、国際交流会館でボランティアとして一階部会に所属して活動に参加した。一階部会では、SDG s や JICA の活動の紹介および展示ブースや、茶道や書道、折り紙などの日本文化体験ブースなどが企画されており、私は SDG s のブースで活動した。ここではフォトチャレンジという写真を撮影した方に景品としてお菓子を配る企画があり、その企画のために、フェスティバル本番前の準備作業として、インスタグラムのフォトフレームを段ボールと印刷した用紙を使って製作した。

（E）私は地下部会担当になり、ステージ発表以外にも地下の広場であるホワイエで何をするか考えた。企画が決まると次は何の道具が必要なのか、その企画の所要時間はどれくらいなのか、ボランティアの人数はどれくらい必要なのか、事細かに話し合い、決めていった。地下部会は 5 人で担当し、前回も参加した企画運営委員の人の意見を参考

にしながら話を進めることができた。授業とは違い、大人の人と話し合うので、これまでに感じたことのない伝えることの難しさとともに、新たな考えに触れることができ面白かった。国際交流会館では年齢も国籍もバラバラの人が一つの目標に向かってフェスティバルを成功させようという姿勢は素晴らしく、また私がその一員でいられてよかったと思う。

【2】活動の成果

◆工夫した点：

（A）私が工夫したことは、どのような企画をするか、その企画をどのように盛り上げるかではなく、当日の参加者である子供たちへのコミュニケーションの取り方である。やはり、普段の友達と接するように接しても、それは子供に対しては良い接し方ではないので普段より優しい声のトーンでハキハキ、子供に理解しやすいようにしゃべった。実際に折り紙を折るときには、子供がわからないところを代わりに折ってあげるのではなく、「反対側は折るから、もう半分側を同じように折ってくれる？」という風に常に子供には折り紙に触れてもらい、あくまで自分で折ったという実感を強く持ってもらうように努めた。

（B）かるたについては、子供たちが聞いて見てすぐにわかるようにわかりやすいようなランキングを選び、読み札と取り札を作成した。例えば、「福井県は図書館の蔵書数が日本１位」というランキングについて、読み札は「蔵書数」を「本の数」に変えて、イラストは本がたくさんある様子を、またその場所が図書館であることがわかるように描いた。このような工夫を６人それぞれでしっかり行っていたと思う。自分が担当したクイズラリーについては、参加者の人に SDGｓについて良く知ってもらえるように、設置場所を SDGｓの目標に合わせた場所にしたり、子供にも視覚的に理解してもらうために写真を載せたりした。

（C）かるた作成では、似ている札、紛らわしい札が多いので、読み札と取り札がそれぞれ合致するように裏面にシールを貼り、アルファベットやカタカナを書く作業をした。最後に、かるたが遊びのみで終わってしまわないように、かるたの趣旨である「福井のことをもっと知ってもらいたい」という思いから「かるたのおさらい」の時間を設けることにした。画用紙に福井がどんな場面で他の県よりも優れているのかという点をいくつか書き出し、穴埋めにして参加者に答えてもらうという形式にした。

当日は人の呼び込みをするために画用紙に世界の遊びのタイトルを書いて事前に準備しておいた。当日はその画用紙を持ち歩いて呼びこみをしたが、手ぶらで話しかけるより、画用紙があった方が相手も呼び込みだとすぐに気づいてくれるためとてもやりやすかった。

（D）私は、地下での企画を提案し、実施することができた。フェスティバルのテーマである“WALK WITH”にちなんで参加者の足に色をぬって、足形だけで“WALK WITH”の文字を書こうという企画を考えた。しかし足では色をぬるのも、色を落とすのも大変ということで手形で描くことになった。私がなぜこの企画を考えたかというと、この企画を通して、年齢や性別、国籍に関わらずみんながひとつの物を協力して作りあげることで、テーマにあるようにみんなそれぞれ違うけれど、みんな共に生きているということを少しでも実感してもらいたいと思ったからである。

◆困難を感じた点：

（A）授業活動のはじめは、見たことも体験したこともないフェスティバルで自分たちがどう関わっていくのかを決めることがとても大変だった。全体像が全く浮かばなかったのと、エンターテイメント性を重視しすぎるとテーマから逸れていくし、テーマに合わせようとすると形式的になりすぎて楽しさに欠けてしまうという矛盾から、話し合いは難航した。みんなの協力でその 2 点を上手く混合した良いレクレーションが思いついたので最終的には問題なかったと思う。

会館での活動で、高校生ボランティアが参加し始めたころ、私たちは今まで通り作業を進めることはもちろん、その大人数の手をどのように使うか、指示を出したり困ったことがあれば助けたりすることも必要になってきて、以前よりとても頼りにされるようになり、責任感が増した。自分が指示をだし、それに従って高校生ボランティアの人たちは積極的に動いてくれたのだが、手が空くと他に何をしたらいいのかわからないのでぼうっとしていることが多かった。自分の作業で手一杯になっていて初めは周りを見ることができなかったが、だんだんと高校生の子たちが暇そうにしているのを見てその人たちに新しい仕事を割り振ることを学んだ。一つだけの作業ではなく、それが終わったら次は何をすべきかなど、反省点を踏まえて指示を出した。

（B）当日はやりがいや成果を感じたが、それと同時に困難や予期していなかったことが起こるなど、臨機応変な対応が求められた場面もあった。フェスティバル当日に感じた困難やトラブルとしては、遊びを行うにはある程度の人数がいることが望ましいため、どうやって人を集めるか、遊びの開始予定時間より早く来た人たちをどうするか、開始予定になっても人が集まらなかった場合どうするか、当日はひとつの遊びにつき３０分を持ち時間としていたが、３０分より早く遊びが終わってしまったときどうなるか、当日行った遊びの中には走り回ってもらうような遊びもあったため、どうしたら転ぶなどしてけがするリスクを減らせるか、というものがあった。これらについて工夫した点は、呼び込みの際に、遊びという催しなので親子連れをターゲットに絞り、より多くの人に来てもらうために、ほかの階の催しなどに参加している人に特にアプローチをかけたりした。予想より早く、われわれの遊びの部屋に来てくれた人たちに対しては、事前に遊

びのルールを説明するなどして、時間を使ってもらうことにした。集客があまりうまくいかないときは、当日ボランティアの方々や、われわれが参加することにより、たとえ来場者が１人でも遊びが行えるようにしていた。また遊びが早く終わってしまったときは、第２ラウンドとして、違う遊びを行うなどして参加者を飽きさせないようにした。さらに子供たちの安全を確保するため、走り回る遊びに関しては、特に小さい子供には当日ボランティアの方々に常にそばについて一緒に遊んでもらい、何かあった時にすぐ対応できるようにした。

（C）かるたについては、かるたを作って実際にやってみる人が、自分たちか担当の先生方だけで、繰り返しているうちに意見などがあまりでなかったことだ。各々の作った読み札・取り札に対する意見はあっても、かるた全体に対する客観的な意見はなかったため、正直なところ、本当にこのかるたは面白いのか不安だった。クイズラリーについては、子供にもわかりやすくすることと SDGｓとは何かを伝える、という２つのバランスをとることが困難だった点だ。最初に作っていたクイズはとても簡単で子供たちだけでも解けるようになっていたが、あまり本当に伝えたいことは伝えられていなかった。しかし最終的にできたクイズは、詳しく情報はあるものの、難しすぎるものになってしまい、当日も「難しかった」という声が何回か聞かれた。

（D）まず私が困難に感じた点は国際フェスティバルに参加したことがなかったため、フェスティバルがどういうものなのか全く想像できなかったことである。国際フェスティバルは数年続いているため、毎年行っている企画や何を重視しているのかを理解するのが難しかった。そして次に、“WALK WITH”を足でペイントするという企画を行うにあたって、色はスプレータイプのペンキを使うのか、スタンプを使うのか、絵の具を使うのかといった点で迷い、どの方法が塗りやすく、かつ汚れにくいのか決めていくのに苦労した。子どもたちにとって何が一番適しているのか、子どもの目線になって考えるのが難しかった。

◆得られた成果：
（A）私は地下部会を担当して自分が考えた企画が実際に現実となり、参加者が楽しんで手形をしている姿を見て嬉しさとともに達成感を感じることができた。地下には基本的には子どもたちが多く、外国人の方の姿はあまり見かけなかった。実際に地下は二階などより人が少なく、始めはペイントを完成させられるか不安だったが、呼び込みをして、その子たちが笑顔でやってくれているのを見て、私まで笑顔になった。この国際フェスティバルを通して多くの子どもたちそして大人たちと交流することができ、ほんとうによかったと感じた。国籍や言語が違うけれど、楽しいと感じることは同じなのだと気付いた。楽しませる側だったが、自然と私自身も楽しむことができた。

（B）得られた成果は、伝えたいことを明確にしてそれをわかりやすく相手に伝えることの重要性だ。かるたでは、客観的な意見は中々得られなかったが、当日は子供たちが楽しく福井県について学んでいる様子が見られて、自分たちが工夫した点が良く出ていたのだろうと思う。一方でクイズラリーでは、わかりやすく伝えることができず、参加したすべての人が SDGｓについて少しでも理解を深めたかどうかは疑問のままである。誰に対してもわかりやすく、その内容に対する理解を深められるという 2 つのバランスをうまく保つことが大切であると感じた。

（C）フェスティバルには子供連れが多く、子供に喜んでもらえることも目標の一つにして催しを考えていたので、その目標は達成できたと感じた。国際フェスティバルということで、海外の文化にも触れあってもらいたいという親御さんの思いもくんで、子供連れの方に外国人スタッフと触れ合う機会を設けて、一緒に楽しんでもらうことができた。また、前年度にフェスティバルにボランティアスタッフとして参加されていた方々も来て下さり、テーマとつなげて催しを考えたのはとてもいいアイディアだとほめてくださったため、今後の地下部会の催しでもそのように全体のコンセプトが一目でわかるような企画を考えるという方針も立てられた。

（D）得られた成果で一番大きかったのは、子供にどのような接し方をするのがよいかを学べたことである。今まで小さい子供とあまり接する機会がなく、どのように対応していいのかがわからなかったが接する回数を重ねるごとにコツをつかんでいった。実際、私が担当していた日本文化体験コーナーに来る参加者のほとんどが小さい子供であったため、初めは戸惑ったが、自分なりにこのように接すれば喜ぶのではないかと試行錯誤しながら接していた。周りからは子供への接し方がうまいと言われ自信がついた。国際フェスティバルを通して得られた成果にしては、国際色にかけるが自分の中で得られた成果では、これが一番大きいものである。

【3】かるた企画について

◆全体の構成：

（A）われわれが作った福井県ランキングかるたは、様々な全国のランキングの中で福井県は何位に位置しているかを調べカルタにまとめたものである。例えば読み札を「福井県は会社の社長が多い県ランキング何位でしょうか？」として、取り札に社長の絵を手書きし、通常のカルタでは取り札の頭文字が記されているところにランキングの順位を書き記した。このかるたを通してあまり知られていない福井県の情報を楽しみながら得てもらおうと考えた。カルタの最後には、おさらいとして、より知ってもらいたい福井県に関する情報を画用紙にまとめ穴埋めクイズを制作した。私は、このかるたを制作するにあたって特に絵に力を入れた。なぜなら、誰が見てもわかるような絵でなければ

カルタとして成立しないからである。だからと言って単純すぎる絵では、ゲームとしての面白さが軽減してしまうので、絵のバランスをとるのに力を入れた。私は、自分の部会の関係上、福井県ランキングかるたが実施されているのを一回だけ見たが、参加者は全員子供で大いに盛り上がっていた。

（B）福井のランキングかるたは1回のゲームを約15分程度と想定し、40枚ほど作成した。みんながそれぞれに福井のランキングを探しだした。そして取り札にランキングに関する絵とランキングの数字を書き、読み札は例えば「福井県の幸福度ランキングは全国で何位でしょうか」というふうに作成した。そして取り札の絵は自分たちで書き、より丈夫にするためにラミネートをしてコーティングした。ランキングかるたをやり終えた後はランキングが1位のお題と47位のお題の中から重要なお題を選出して、確かめとして穴埋めクイズをだした。例えば「福井県は全国の中で1番幸福度が~」というように空白になっている所を答えてもらうようにして、より理解してもらい、少しでも記憶に残せるような工夫をした。

私は、とくにどんな内容のランキングをかるたにするかを試行錯誤した。幸福度や生産量のような真面目なお題だけでなく、「部屋が汚い女子が多いランキング」などユーモアを含めたような気をひきやすいお題を加えるなど工夫した。また、取り札の絵もより分かりやすく伝えられるように何回も書き直したり、色をつけたりして少しでも答えのヒントになるように努力した。

（C）ハロウィンの時期なのでそのコンセプトを含めたデザインで展示物を作成していた。子供は文字よりも絵や色に惹きつけられると推測し、いろんな模様や色を使ってカラフルに仕上げた。当日はその展示を立ち止まって見てくれる人も多く、反響は大きかったと思う。

◆作成した展示物を、実際に展示してみたときの所感、反省点：

（A）このカルタを制作している段階では本当に盛り上がるのか、積極的に札をとってくれるだろうかと不安があったが、実際には、札を積極的にとってもらえて盛り上がった。カルタ終了後のおさらいのクイズも答えてくれる子供が多くおり、自分たちが意図していた楽しく福井県の情報を知ってもらうということができた。同時のタイミングで札を取ったときには喧嘩をすることなくじゃんけんをしたり、率先して子供たちだけで良い雰囲気を作り上げているという印象を受けた。反省点としては、必要のない、関心が少なそうな情報をカルタに取り入れてしまったということである。例えば、福井県のメロンの消費量が全国で21位ということである。この情報は、21位とぱっとしないため記憶にも残らないうえに重要でもないのでカルタにする必要がないと思われた。本当

に知ってもらいたい、1位や最下位の情報だけを題材にカルタを制作するべきであった。

（B）私の持ち場ではなかったため、一度しか見に行くことはできなかったけれど、みんなとても楽しそうにかるたをとっていてとても安心した。初めて行う人でも取れるようにわかりやすい絵を描いたつもりでいたけれど、実際に子供目線で見てもわかりやすいのかどうか不安だったので、子供たちが普通のかるたのように楽しめていてよかった。また、福井の魅力について知ってもらうことや、今までにない発見をしてもらうというテーマも達成できた。最後にかるたのおさらい表をつくって、子供たちにかるたを通してわかったことを聞いたときに、みんなすらすらと答えることができていてこのかるたをやってよかったと感じた。反省点としては、国際フェスティバルということで、当初は福井のかるたと世界のかるたを作ることにしていたが、時間の関係で福井のかるただけになってしまったため、子供をターゲットにしていたけれど、もし、世界のかるたができていれば、子供と外国人が触れ合う機会を、かるたを通じて作ることができたのではないかなと思った。

（C）私はおもに、どんな展示物をするか指示を出すこと、そしてその作成と、掲示を担当した。主に全作業に関わっていたと思う。２階担当者は私を含めて５人で、体遊びと世界の遊びの２つを同時進行していた。体遊びの方に大人のボランティア３人が担当し、世界の遊びはわたしと高本君で担当したため、私たちが指示を出して仕切らない限り作業は進まない状況だった。展示したとき、壁や展示スペースが予想以上に広く、作成済の掲示物を全て貼っても寂しさが残る殺風景な部屋にしかならず、はじめはとても困った。しかし会館側が協力してくださり、材料を増やしてもらってさらにたくさんの展示物を作って壁やドアに貼っていった

【4】総括

◆反省点：

（A）私たちが企画した福井県ランキングかるたに関する反省点は、福井県が抱えている課題と福井県ランキングかるたを絡ませることができなかったという点である。ゲーム要素を強くし対象を子供に絞ると課題探求の要素がなくなるが、課題探求の要素を強めると楽しむことができないというジレンマがある。私たちは、楽しんでもらうことを重視したため課題探求はおろそかになった。国際フェスティバル自体に関する反省点は、参加者がゆっくりできる空間を作るべきであったということである。今回は、三階には何も展示をしていなかったので椅子を配置して休憩できる場を設ければ、参加者が休憩をはさみながらじっくりと色々な展示物、イベントが楽しめたと思われる。個人に関する反省点は、日本文化体験コーナーへの呼び込みが足りなかったという点である。人が来ないという時間が何度かあったので、会場を歩き回り呼び込みをしていたら、もう少

し盛り上がった可能性がある。

（B）全体的な反省点は、まず 1 つ目に、自分からもっと積極的に意見をだせばよかったという点だ。授業内では、少人数である同じ学部・学年の人達との活動だったので、素直な意見も出しやすかったが、企画運営委員会の中では、自分から意見を言うことがあまりできなかった。JICA 出身の人や、社会人の方たちの意見を聞くと、それが尤もだと思ってしまって、自分の意見は抑えがちになっていた。もっと自分が意見を出していたら、先に述べたような展示物に関する反省点も少しは減っていたのではないかと思う。2 つ目に、外国人向けのプログラムを提案すればよかった、という点だ。フェスティバル終了後の全体挨拶の時に、昨年より外国人の来場者が増えていた、と発表があった。それに対して、外国人も楽しめるプログラムは少なかったと感じた。私たちが作ったかるたは、日本語の読み札しかなくて、もしまったく日本語がわからない外国人が参加していたら楽しめていなかったと思う。また、他のプログラムも、どちらかというと日本人に外国の遊び・情報を提供する、というものだったと思う。以上のことから、外国人のためのプログラムを増やすとより「国際交流」を体験できるフェスティバルになると思った。

（C）反省点として、思っていたより準備する時間がなかったので、もう少し計画的に準備を進めていけたらもっと良かったと思う。さらに企画をもっと国際色のあるものにできたらよかったと思った。また、国際交流会館でのミーティングの際にもっと初めから自分から発言できればよかったと思う。まわりは大人ばかりで発言するのを少し拒んでしまっていたが、みなさん優しく意見をきいてくださったので、そんなに萎縮する必要はなかったのだと気付いた。

（D）全体としては、2 つの反省点があげられる。まず、休憩スペースがなく、疲れても座ったり休んだりする場所がなかったため、フェスティバルに来たお客さんたちが一息つくことができるスペースを作るべきだったと思う。また、予算の関係があるのかもしれないが、去年と比べて装飾など全体的に寂しい印象があったことが少し残念だったと思う。もしも予算が確保できるのであれば、去年のように、3 階も使用したほうが賑やかになると思うし、休憩スペースも作ることができて良いと思った。

（E）もう少し国際フェスティバルについて知ってから参加するべきだった。初めて経験することで戸惑って当たり前だけれど、部会長に指名されたときに何もわからない状態だったため、全体への指示も遅れてしまったし、私自身質問する側になってしまっていたため、とてもやりづらかった。ステージの出演者の方々とのコンタクトも前日になって初めてとるような状態だったため、もう少し交流する機会が欲しかっ

た。自分の持ち場に対しては、お客さんの出入りが多い時間帯に人がなかなか足りず、子供向けの企画だったこともあり、あまり乗り気ではない大人の方や批判的な意見を言ってくる参加者の方の対処をすることができなかったことが反省点として挙げられる。大人も子供も楽しめるような企画を作るべきだったとも思ったし、楽しんでもらえるような工夫をもっと凝らすべきだった。

◆後輩に伝えるべきアドバイス：

（A）後輩に伝えるべきアドバイスは、福井大学で出し物をやることを明確に伝えることと、自分たちが指示・誘導する側になることを念頭に置いておくということである。前者について私たちは、例年福井大学の出し物がある、という情報から 6 月から始まった企画運営委員会の時には特に福井大学の出し物についてはすでにあるものと思っていたため、発言していなかった。しかし、8 月頃に委員の方から、福井大学の出し物はまだプログラムに反映されていない、との連絡があり、すごく焦った。最終的には、かるたを実施することができたが、このようなことがないように、しっかりと福井大学の出し物をしたいことを伝えてほしいと思う。後者について、企画運営委員は当日ボランティアの人たちに、準備や当日の動きについて指示することが多くあった。私は、特にフェスティバル当日のボランティアの人たちにうまく支持を出せていなくて、何もすることがないボランティアの人がいた時間もあったので、そうならないようにしてほしいと思う。

（B）後輩に伝えるべきなのは、来場者だけに気を使うのではなく、当日のボランティアの方々との関係も気を付けないといけないということである。当日私たちは責任者という立場であったが、私たちだけでその場を回せたなどということはなく、当日ボランティアの主体的な行動に助けられたことが何度かあった。彼女たちと良好な関係を築いていると、そういった時に自ら動いてくれたりすることがあるので、初めて会った時から積極的にコミュニケーションをとろうとするのが良いと思う。

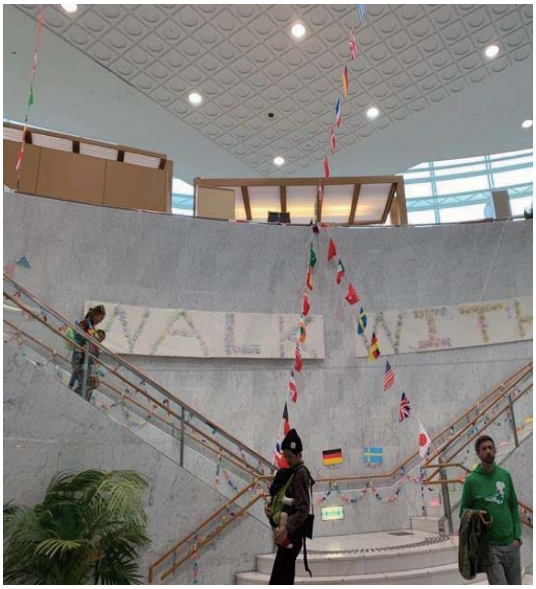
（C）後輩に伝えたいアドバイスは、自分たちで考える企画は子供が楽しめるものがよいということである。なぜなら、参加者に子供が多いからである。国際フェスティバルのことを第一に考えると PBL の要素を入れるのは困難になるため子供が楽しめる企画を考えたほうが国際フェスティバルを終えた後の達成感は大きいと思われる。それと子供の接し方に慣れるということが大切だと思われる。参加者のニーズに応えることを一番に考えるべきである。さらには、反省点でも述べている椅子を設置し休憩場を設けるということを実践してほしい。最後に、自主性をもって国際フェスティバルの企画運営委員会、本番当日に臨んでほしい。本番当日は正直自分が思っていたより盛り上がっていたので、国際フェスティバルの熱気に負けない気持ちが必要である。

（D）出し物を考えるときは、国際フェスティバルの参加者についてよく知っておく必要があると思う。外国人の数より子供連れの人が多い印象だったから、親子で楽しめる企画を考えることが重要だと思う。また、子供に様々な文化体験をしてもらいたいと思っている親が多いと思うから、学びにつながるような催しを考えるべきだとも思う。また、地下部会を担当したものとして、地下は参加者全員が開閉会式やお菓子まきで集まる場所だから、国際フェスティバル全体のコンセプトと関連付けた企画を考えてお客さんと一緒に楽しむことが大切だと思うし、フェスティバルの成功につながると感じた。また、毎年参加されている方が数人いるため、よく話を聞いて全体の流れを把握しておくとよいと思う。ステージ発表に加え、ホワイエで様々な催しが行われるため、人の出入りが激しく、一番混雑する場所なので、スケジュールの把握をして来場者に質問されたときにすぐにこたえられるような準備が必要だと感じた。また、地下部会の部会長には絶対になるべきではない。毎年参加されている方に迷惑をかけることになるから初めて参加する場合は自分の持ち場に専念するべきだと感じた。

（E）後半になるにつれて（特に夏休み後）活動が一気に本格化して忙しくなる。最初は時間に余裕があるが、それをしっかり有効的に使うことおすすめする。あまりダラダラ進めていると後で焦ってしまい、完成度の低いものしか作れなくなってしまう。時間に余裕のある初期のうちに、授業時間を使ってフェスティバルまであと何回授業があるのか、その時間で何をするべきかのスケジュール作成を早めにしておくと良い。それをみれば自分たちの活動進行が遅れていることに気づくことができるから。

（F）思っているより準備をする時間がないので計画を立てて進めていくといいと思う。また、会館でのミーティングでは消極的にならず、思った意見は言った方が良い。主体的に参加したほうが楽しむことができると思う。

（G）国際フェスティバルでは、親子連れや、外国の方がとても多いので、そういった方々に合わせて配慮して、楽しめるような企画作りをしたらいいと思う。



３．課題探求プロジェクトの成果

今回の「課題探求プロジェクトⅠ」では、7 名の受講生たちが「福井県ランキングかるた」を制作し、フェスティバル本番でかるた企画を実施した。体験型の企画を志し、少人数での取り組みだったにも拘わらず、本番では多くの児童が集まり、企画は盛り上がりを見せた。国際交流会館での活動は、福井県国際交流協会の職員やボランティアの市民の方々との協働のなかで、さまざまな検討課題に直面しながらも、ひとつの催事を

実現させる非常に良い経験になったと考えられる。福井県国際交流協会の関係者や地域のボランティアの方々とともに活動に取り組むなかで、受講生たちは地域社会の抱える課題や問題を知る機会になった。また、かれらはフェスティバルの来場者に応対する役割も果たしたため、その反応をじかに確かめるとともに、外国人や地域の子どもたちとのコミュニケーションの機会に恵まれることにもなった。ここでの経験は、後続する「課題探求プロジェクト」や、留学、卒業研究、就職活動といった受講生の以後の活動に役立つと考えられる。

４．総括・反省

企画運営委員の一員として企画を進めたり、調整役を果たしたりする活動は、学外で社会的責任を担う経験にもなったのではないかと思われる。受講生の報告から、各々が企画物の制作と並行して、学外でもさまざまな困難に直面した様子をうかがうことができる。得がたい経験になったものと考えられる。

企画については、催事としての楽しさという点と授業としての課題探求という点をいかに融合させるかといった点で困難を感じた受講生が多かったようである。また、当日の会場では、来客への対応や展示の仕方にも反省すべき点が認められる。国際色と地域色を融合させるような課題を発見し、調査や展示を効果的に発信する工夫は、今後も必要となるだろう。

課題探求プロジェクトⅢ A ／Ⅲ C

（３年次前期／ 4年次前期：グローバルアプローチ）

国際地域学部　3年
大野　愛美
小田　悠菜
亀井　麻衣
杉山　栞里

国際地域学部　4年
板谷　月紀
柳浦　千春

目次

1. プロジェクトの趣旨
2. プロジェクトの概要
3. 今年度の野外上映会の仔細
4. 活動スケジュール（表）
5. 上映作品・上映日・会場・調達機材等の選定について
6. 宣伝・広報活動について
7. 野外上映会当日の運営について
8. アンケート結果
9. 全体を振り返って
10. その他

映画の自主上映会の企画・開催を通じた地域振興の取り組み
—福井市中央公園での第２回野外上映会の実施・上映作品『ティファニーで朝食を』—

1.　プロジェクトの趣旨

暗闇に包まれた空間で多くの人が共に古今東西の映像作品を鑑賞できる映画館は、かつて地域の文化発信の拠点としての役割を担っていた。しかし近年、DVD やブルーレイなどの簡易で高性能なソフトや各種 AVL 機器の発達に伴い、映画館に足を運ぶ人の数が大幅に減少している。その一方で、国際映画祭を催すまでに至った夕張市をはじめとして青梅市や盛岡市など、地方自治体が映画による地域振興に取り組むケースが、昨今では珍しくない。また、往年の名画や商業ベースに乗りにくい作品の自主上映・企画上映が有志団体の主催で行われるケースも、各地で増えてきている。加えて、大学でも近年、映画の上映会を通じて多文化理解を深める取り組みが行われ、映像文化による地域振興のあり方が学問的な研究対象になりつつある点も注目される。

デジタル化に伴う映像テクノロジーの飛躍的な進歩に伴い、映画館での上映に使用されるフィルムや映写機を用いずとも、DVD あるいはブルーレイ・ソフトと高性能のプロジェクター及びスクリーン、それに映画館に匹敵する暗闇の空間さえ確保できれば、映画は成立する。本プロジェクトは、こうした考え方に基づき、県内外の自主上映サポート機関と連携しながら、上映作品、上映日、上映会場等を合議の上で決定し、上映会を成功に導くことで映画による地域振興の端緒を開く取り組みである。

2.　プロジェクトの概要

2019 年 7 月 20 日（土）に福井市中央公園で実施された野外上映会は、福井大学国際地域学部の基幹科目である「課題探求プロジェクト」の取り組みの一環として企画された。昨年度の『ローマの休日』野外上映会に引き続き第 2 回目となる今回のプロジェクトでは、『ティファニーで朝食を』（1961 年）を上映した。主演は、『ローマの休日』と同様にオードリー・ヘップバーンが務めており、昨年度からの一貫性をもたせることに成功している。さらに、昨年よりも高性能なプロジェクターとスクリーンを使用し、より美しい映像を来場者に楽しんでいただくことができた。今回も、昨年に引き続き福井大学工学部明石研究室の協力を得て、会場を美しいイルミネーションで彩った。また、上映前の 30 分間プログラムとして、「福井大学アカペラサークルふれんど」によるアカペラパフォーマンスや、上映作品及び主演のオードリー・ヘップバーンの説明を行った。

イベント当日には約 70 名の来場者があり、好評を得た。来年度以降も野外上映会イベントを企画し恒例化することで、より「地域との繋がり」を推進できるのではないだろうか。

3. 今年度の野外上映会の仔細

（1） 開催日時：2019 年 7 月 20 日（土）19：00～
※悪天候の場合の予備日：7 月 26 日（金）

（2） 会場：福井市中央公園北側芝生広場
※26 日も同上、26 日も悪天候の場合は福井大学アカデミーホール

（3） 上映形態：野外上映会＋イルミネーション（入場料無料）
※イルミネーションに用いたのは、福井大学工学研究科の明石行生教授の指導の下で同研究室の学生たちが作成した器材である。

（3）上映作品：『ティファニーで朝食を』（1961 年：115 分）

（4）作品配給：MMC（(株）ムービーマネジメントカンパニー）

（5）上映会場：福井市中央公園北側芝生広場

（6）機材調達：(有)スペース源内

4. 活動スケジュール（表）

※授業…授業中、会議…授業外での集まり、個人…授業外での個人的な作業

4 月	【授業(17 日)】クラス分け→オリエンテーション 【授業(24 日)】上映作品候補挙げる、上映会の日時と場所の検討、イルミネーションの貸出許可得る
5 月	【授業(8 日)】上映候補作品の選定作業とレンタル料調べ 【会議】イルミネーション下見 【個人】国際地域学部全学年に候補作品の中で観たい映画についてアンケートを実施 【授業(22 日)】各候補作品の冒頭を鑑賞し、上映作品を『ティファニーで朝食を』に決定
6 月	【授業(5 日)】市役所（公園課）との交渉結果及び MMC との契約手続きの報告・確認、今後の宣伝・広報活動の進め方の検討、役割決め、上映作品『ティファニーで朝食を』を全編通して鑑賞 【個人】ポスター案・会場設営のデザイン・宣伝計画とその内容、イベント名を考える 【会議(12 日)】各自のポスター案の見せ合いと候補決め 【会議(18 日)】会場（中央公園）の下見 【授業(19 日)】ポスター修正と候補の再決定 【個人】決定した 2 種類のデザインを基にサイズ・言語の異なるものを作成（A2~4 サイズ、日本語・英語)、ポスター内の情報や体裁の微調整 【会議（26 日)】㈱スペース源内との事前打ち合わせ

7 月	【会議(2 日)】ポスターデザイン最終決定、ポスター配布先と配布・連絡担当者の決定 【個人】アンケート案の作成、物品貸出の書類提出（教務課・国際地域学部運営管理課へ） 【授業(3 日)】ポスター内の情報や体裁の最終確認と修正 【個人】ポスター配布先・イベント情報サイトへの連絡、配布する記念品のデザイン案（栞）、食堂に流す動画の案考える 【会議(5 日)】イルミネーション再度下見（使う器材をある程度決定） 【個人】福井大学広報課からの取材受ける、ポスター…配布先への連絡・印刷・学内への配布開始、イベント情報サイトでの掲載開始 【会議(9 日)】上映前 30 分プログラムの役割決め、学外へのポスター配布開始 【会議(11 日)】学内の教室でイルミネーション仮設置と点灯確認（器材の最終決定） 【個人】30 分間プログラムの原稿を各自考える、記念品をパンフレットに変更する案 【授業(17 日)】アンケートの最終修正、上映会前当日のことなど最終確認、配布する記念品をうちわに変更する案 【会議(19 日)】中央公園で市役所公園課の担当者と事前立ち会い、ヨーロッパ言語資料室への備品（机等）の運搬と保管 【上映会当日】午前中：小さな備品買い出し、電飾の防水と配線確認 夕方以降：荷物の運搬、会場準備→本番→片付け 【授業(24 日)】アンケート集計と分析及びそれを基にした振り返り、備品返却
8 月	【個人】レポート（活動報告書）の作成と提出

～活動の進行についての反省点～

第 1 クォーターの授業（4.5 月）は、3 限目だけで終わることが多かった分、開催日目前になって授業外での集まりや個人的な作業が非常に多くなってしまい、大変だった。先生方との授業は 3 限目だけで終わるにしても 4 限目の時間は生徒のみ残るなどして、少しずつ早めに進めておけばよかったと感じる。役割分担に関しては、上映作品を決定後、6 月上旬に早めに決定したものの、結局その通りにはいかず、なかなかスムーズに進まなかった。活動がスムーズに進まなかった原因として、主に二つのことが考えられる。一つ目は、大まかな役割分担はしたものの、誰が何をいつまでにするという具体的なスケジュールを決めていなかったということである。ポスターの完成も修正を重ねているうちに時間が経って予定より遅れ、その分宣伝開始も遅くなり、上映会開催予定日

から 2 週間切った頃となってしまった。二つ目は、昨年度の上映会にはなかったものを取り入れようとしたことである。今年は 30 分間プログラム（アカペラパフォーマンス・司会説明・映画説明）や記念品の配布など、昨年度にはなかったものを新たに一から企画したため、後半（6・7 月）にするべきことが非常に多くなってしまった。当初配布したいと考えていた記念品については、著作権の問題が浮き上がり、栞→パンフレット→うちわというように案が変わっていったものの、最終的に上映会に間に合わず作成出来なかったのは残念に思う。

来年度はこれらの反省点を踏まえ、役割だけでなくその後の細かなスケジュールも予め決定しておくということと、時間に余裕を持って早めに進めておくということを意識すれば活動がスムーズに進むのではないかと思う。

5. 上映作品・上映日・会場・調達機材等の選定について

① 活動（検討）内容

今年度の野外上映会は、前年度に開催された野外上映会の実施内容を基に第 2 回野外上映会として企画・活動を進めた。まず、今年度の野外上映会の目的は映画による地域復興を図ることとし、前年度同様にイルミネーションで会場を飾る演出にプラス・アルファとして、映画上映前に本学所属の福井大学アカペラサークルふれんどによるアカペラ演奏を企画した。

また、今年度は上映作品としてオードリー・ヘプバーン主演の『ティファニーで朝食を』を選んだ。その選定理由は、①映画の知名度が高いため集客がしやすいこと、②前年度の上映作品がオードリー・ヘプバーン主演の『ローマの休日』であり、主演女優のシリーズ化をねらうこと、③夏の星空の下、夜風に吹かれながらの野外上映会の雰囲気に映画の雰囲気がぴったりであること、の 3 点が挙げられる。

上映日については、前年度の開催日を参考にし、上映会の主催である自分たちの予定と照らし合わせた結果、7 月 20 日（土）と決定した。また、悪天候の時のためにその翌週の 7 月 26 日（金）を予備日に決めた。野外上映会の会場も、前年度と同様にアクセスの良い福井市中央公園とした。映画の上映機材に関しても、前年と同じ業者の方に依頼したが、アカペラ演奏で必要な機材（マイク・スピーカー等）はサークル側に依頼した。

今年度の野外上映会における役割分担は、まず学生の人数が 3 年生 4 人と 4 年生 2 人の計 6 人であったため、それぞれが複数の役割を担い、大変な時期もあったが、連絡を密に取り合いながら各自責任を持って準備を進めることができた。

② 得られた知識・経験

はじめに、今年度の野外上映会は前年度の野外上映会の反省を生かしたことで、企画・進行をスムーズに進めることができ、さらにプラス・アルファを加えた野外上映

会を行うことができた。

今回の上映会を通して、一つのイベントの企画から準備、宣伝、そしてイベント当日の運営までを行うということは、膨大な時間と労力を要するものであり、不測の事態に備えた柔軟な対応も求められると学んだ。また、この１つのイベントは学部の先生方をはじめ、工学科明石研究室、教務課、国際地域学部運営管理課、福井市役所公園課、映画上映の機材業者の方などのたくさんの協力があって成り立っているものであり、一人ひとりが各自責任を持ってその役割を務めなければならないと学ぶことができた。

しかし、イベントの企画をするにあたって最も重要なことは、いわゆる「ほうれんそう」、つまり、報告・連絡・相談の３つであると感じた。例えば、上映会のパンフレットやポスターをどこに、どれだけ、配布するのか、もしくはしたのか、また、市役所や機材業者の方との打ち合わせはいつなのか、映画上映に関して確認しておかなければならないことはないか、さらには、大学から借りることができる備品は何があるのか、イルミネーションはどんなイメージにするのか、など細かい内容ではあるが、具体的にはっきりしておかなければならないことがたくさんあった。これらの情報は、野外上映会の主催者である自分たち生徒の間でも共有し、その個々の内容を把握するように努めていたため、野外上映会の準備期間をスムーズに進めることができた。

③ 反省点（今後の課題）

前年度のプラス・アルファの案として、アカペラ演奏に加え、上映会当日に本上映会の開催目的や上映作品の簡単な説明を記したパンフレットや上映作品をイメージしたブックマーク、うちわなどを参加者に記念品として配布するという案が出た。この記念品を作る目的は、①梅雨の季節の蒸し暑い夜に参加者の方が少しでも快適に映画を楽しめるようにするため、②この野外上映会に参加したという記憶が参加者の方に形として残るようにするため、の２点である。しかし、この構想を打ち出した時期が、①宣伝用のポスターやパンフレットを製作した後であったため、上映会開催日までに新たなデザインを練って製作するのに十分な時間が取れないということと、②上映作品のデザインを使用するには著作権の複雑な問題が発生する可能性があるということで、この案は断念することとなった。記念品自体の製作目的は、野外上映会にとって有益であるし、今後継続して野外上映会をするならば早い段階で一度検討してみてはどうだろうか。

また、今回の野外上映会の準備には、はじめは２週間に１度の３限目、４限目の時間を充てていたが、期間の後半にかけては、１週間に１度の授業に増やし、さらに学生同士で予定を合わせて会議を行ったりして、授業時間以外にも多くの時間を費やして準備を進めていった。期間の後半になってから準備するべきことが増えてしまうの

は仕方のないことかもしれないが、はじめの段階から学生自ら上映会準備の計画を綿密にたて、できるだけ授業時間内に終わるように、早めに準備を進めるようにすれば、パンフレットやポスター、SNS、メディアによる宣伝期間も長くなり、さらに多くの集客も見込むことができ、より完成度の高い野外上映会を行うことができたのではないだろうか。

6. 宣伝・広報活動について

①活動（検討）内容

まず、二種類のポスター作製と公共施設への掲示に取り掛かった。最初はそれぞれで考えたデザインを持ち寄り、検討してその中でよかったものに若干の修正を加えての完成としたが、検討するうちに文字メインと写真メインの二種類を作ることになった。そのためもう一度デザインを各自で考え、その中から二種類に修正を加え文章やデザインを授業で検討・修正し、完成とした。この二枚のポスターは、大学内・映画館・市立図書館・県立図書館・ホテルフジタ・駅・市役所・国際交流会館・響きのホール、および可能な限りでバイト先にも掲示をお願いし、また少量を持ち帰り用のチラシとして置いていただいた。

そのほか、メディア対応も行った。福井の無料情報誌「ファミール」や福井新聞、また福井のポータルサイト「ふーぽ」・「ふくいドットコム」などには事前にこちらから連絡し、記事を載せていただけるよう依頼した。FBC テレビ・福井ラジオなどからは、ポスターや新聞に載せていた電話番号を通して先方から連絡があり、電話での取材を基に記事に、あるいは放送をしていただいた。上映会当日は新聞社の記者の方が来てくださり、上映会中の記事も書いていただいた。

福井大学報道機関向けニュースレターにも取材をしていただき、記事にしていただいた。SNS では Instagram・Twitter・Facebook を活用し、アカウントを作って情報発信を行った。発信先のフォロワーは主に国際地域学部の学生であった。

②得られた知識・経験

やはり二年目ということもあり、学内外問わず知名度が少なからずあったことは宣伝の上で大きかったように思う。ポスターだけでなく、メディアで福井全体に情報が伝えられたこともよかった。また去年よりも SNS で情報を得た人が多かったことに驚いた。

ポスター制作や栞制作の案に関して、著作権の問題に躓いたことはかなり勉強になったと思う。公的なイベントでの映画の写真や台詞の使用がどこまで可能なのかという判断が難しく、思うように作成ができなかった部分は次に生かすうえで覚えておかなければいけない点である。

③反省点（今後の課題）

去年と同じように、宣伝・広報への動き出しが遅くギリギリだった。ポスター掲示

など、見ていただくのに一週間ほどの短期間しか無かったので、もう少し早い時期に掲示していれば宣伝効果がもう少しあったとのではないだろうか。全員でのポスター作製ではなく少人数に役割を割り振り、早い段階でデザインを決めてしまうという選択肢もあった。

7. 野外上映会当日の運営について

④ 活動内容

役割分担：司会進行１名（小田）・映画概要説明１名（杉山）・入場案内２名（柳浦、亀井）・受付１名（大野）・カメラ１名（板谷）

上映会当日は午前中から準備が進められた。午前中にメンバー3 人で虫よけスプレー、ゴミ袋、イルミネーションに使用するピンポン玉等を購入。その後、学校にメンバー全員が集合し、イベントに向けての最終準備が行われた。具体的にはイルミネーションの配線確認、光源機材への防水処置、本番の流れの最終確認等を行った。機材やイルミネーションのオブジェは先生方の車で中央公園まで運んだ。

学校で機材・オブジェを車に積むメンバー（3 名）と会場である中央公園で機材・オブジェを設置するメンバー（3 名）に分かれて本番に向けての作業・準備を進めた。

イベント本番は下記のような流れで行われた。

イベント準備 → 司会からの挨拶 → 映画説明 → 福井市の PR 動画上映 → 映画上映 → 司会から終りの挨拶、アンケート記入依頼 → アンケート回収 → 片付け

⑤ 得られた知識・経験

イベントに携わったメンバーの人数が 6 名と少なく、それぞれへの役割分担への重要性を再確認した。イベント本番はメンバー一人一人が参加者やイベントに気を配る必要があると思った。当日は天候の変化にも悩まされ、急遽決定した事項が多く臨機応変に対応する能力が大切だと再認識させられた。イベントの本番では来場者の反応を加味した対応も大切だと感じた。年齢層は 10 代から 70 代と幅広く、来場者を退屈させず映画の雰囲気に引き込むような司会や会場づくりを心がける必要があると思った。

⑥ 反省点（今後の課題）

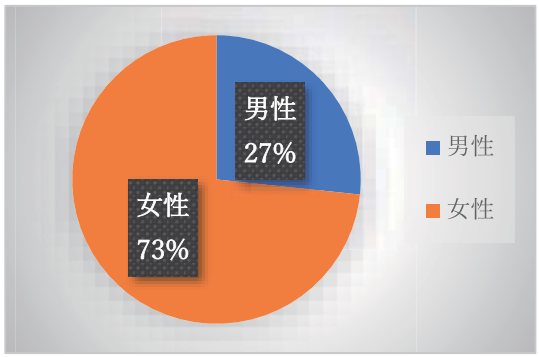
今回はイベント当日に必要な備品の購入や、イルミネーションの配線の確認など、直前の仕事が多かったように感じた。可能であれば、事前に中央公園に行き、実際にイルミネーションや当日に使用する機材を配置して、会場全体で必要な備品を確認しておくとよいと思った。また、当日のオブジェ・機材運搬に関しては運ぶ物の大きさに対して運搬する車が小さく何度も公園と学校を往復しなければならなかった。次回からは事前に機材やイルミネーションのオブジェの大きさを把握して、軽トラックなどを用意するのが良いと考えられる。イベントを開始する直前まで機材やオブジェの配置を行ってい

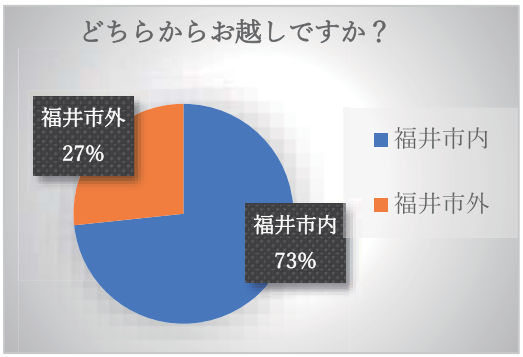
たため、早めに来た来場客に会場に入ってもらうことができなかった。

イベント本番は映画説明、福井市の PR 動画が少し長いように感じた。映画説明の間は映画に関連あるスライドを用意するとよいと感じた。また、映画の字幕が小さく後ろの方の参加者が映画を鑑賞しにくかったようだ。スクリーンの位置をもう少し上にあげるとよいだろう。加えて、アンケート記入の際に手元が暗くアンケート記入が難しいという意見が多かった。アンケート記入の時間の際にはライトを照らせるようにするなどの対策をする必要がある。

8. アンケート結果

【アンケート協力者性別】　男性　16 人　女性　44 人　（来場者約 70 人）





【どちらからお越しですか？】

福井市内　44 人　福井市外　16 人

（男性　福井市内　13 人　福井市外　3 人）

（女性　福井市内　31 人　福井市外　13 人）

福井市外［越前市　1 人　吉田郡　1 人　越前町　1 人　坂井市　3 人　勝山市　2 人　あわら市　1 人　鯖江市　7 人］

男性　福井市外　［坂井市　1 人　鯖江市　2 人］

女性　福井市外　［越前市　1 人　吉田郡　1 人　越前町　1 人　坂井市　2 人　勝山市　2 人　あわら市　1 人　鯖江市　5 人］

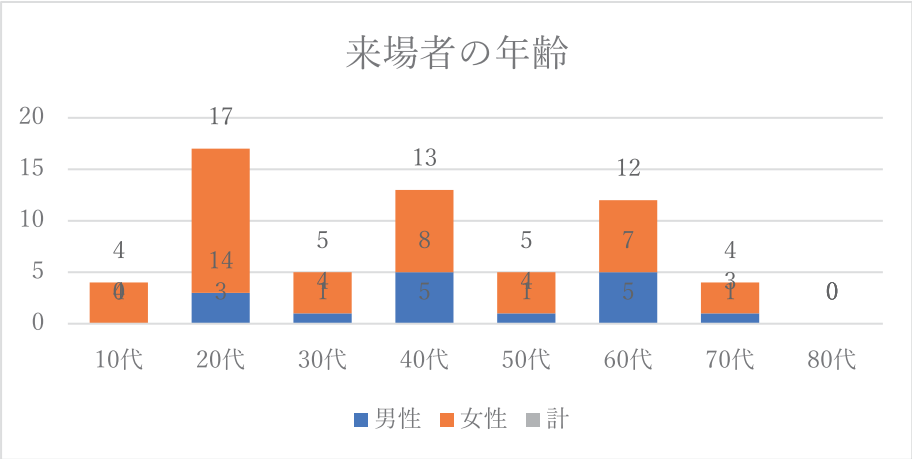
【年齢を教えてください】

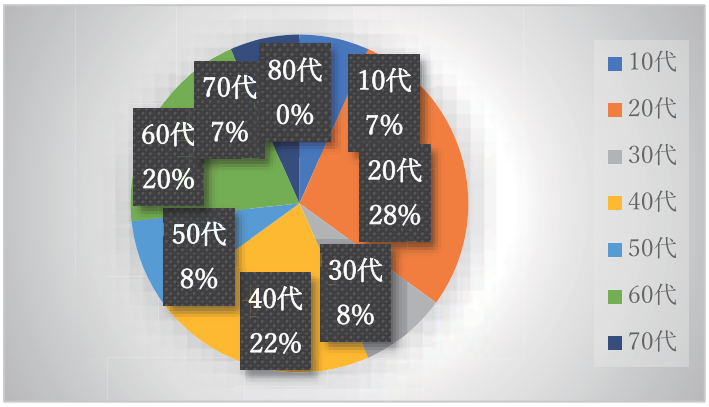
10 代　4 人（男性　0 人　女性　4 人）　20 代　17 人（男性　3 人　女性　14 人）

30 代　5 人（男性　1 人　女性　4 人）　40 代　13 人（男性　5 人　女性　8 人）

50 代　5 人（男性　1 人　女性　4 人）　60 代　12 人（男性　5 人　女性　7 人）

70 代　4 人（男性　1 人　女性　3 人）　80 代　0 人（男性　0 人　女性　0 人）





→10 代、30 代、50 代の来場者が少なく、20 代、40 代、60 代の来場者が多いという結果は意外だった。幅広い年齢の方々に来場していただいたことがよくわかる。

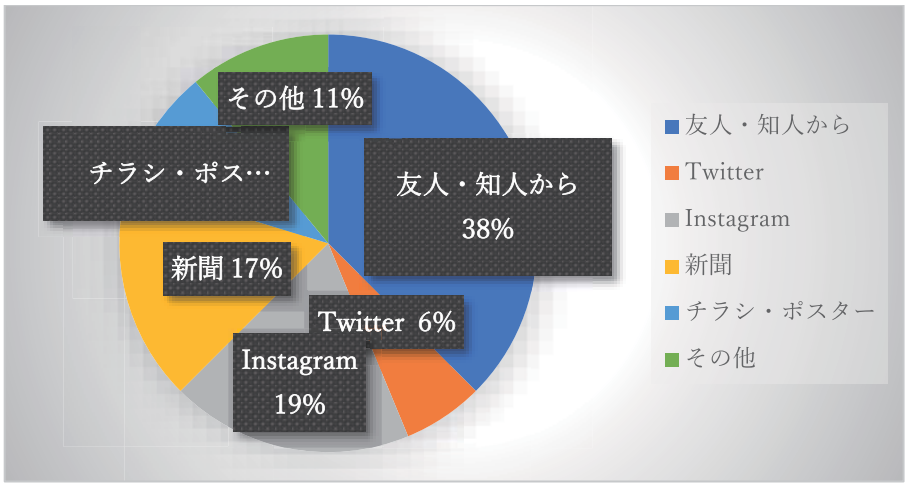
【ご職業を教えてください】

	男性	女性	合計
会社員	9	12	21
自営業	2	2	4
自由業	1	0	1
教職員	1	0	1
公務員	0	3	3
学生・生徒	2	10	12
専業主婦	0	4	4
パート・アルバイト	1	10	11
無職	2	0	2
その他	0	3	3
	18	44	62

その他　女性　臨床検査技師

【どのようにして本イベントをお知りになりましたか？】

	男性	女性	合計
友人・知人から	6	18	24
Twitter	3	1	4
Instagram	1	11	12
新聞	3	8	11
チラシ・ポスター	2	4	6
その他	2	5	7



その他　男性　［ラジオ　Facebook］
その他　女性　［Famile 2 人　学内のチラシ(掲示)を見て　夫からの誘い
インターネット(イベント情報)　ふくーぷというサイト］

→友人・知人から野外上映会について知った方が約 4 割と一番多く意外であった。SNS は Twitter よりも Instagram のほうで知ってくださった方が多く、その中でも特に女性は Instagram の割合が高かったため、女性の方が男性よりも Instagram をチェックしていることが分かった。

【なぜこのイベントに参加しようと思われましたか？】

	男性	女性
「ティファニーで朝食を」を見たかったから	2	18
主演のオードリー・ヘップバーンに惹かれたから	3	7
映画が好きだから	2	8
野外上映会というものに参加してみたかったから	11	30
その他	4	3

その他　男性
・野外上映になつかしさを感じたから
・PBL の成果に関心
・福井活性化のために活動を応援したかったので
・昔（若かりし頃）を思い出して
その他　女性
・友達に誘われたため
・合唱が好きだから。ききたかったから。
・子供の頃よく行われていて懐かしかったから

【本イベントの満足度】（5 が最も高い満足度）

	男性	女性
1	0	0
2	0	0
3	0	4
4	7	16
5	6	13
無回答	3	11

【次回もこのようなイベントがあれば参加しようと思いますか？】

	男性	女性	合計
はい	12	32	44
いいえ	0	0	0
わからない	0	3	3
無回答	4	9	13
	16	44	60

【上映作品の選定について（良かった点、ご要望等）】
・オードリー・ヘップバーンが好きなので楽しく観賞させてもらいました。（20 代女性）
・雰囲気とマッチしていて素敵でした。（20 代女性）
・ロマンチック♡ステキ！（20 代女性）
・自分では選ばなかったりして、普段見ることのできない作品が見られてよかった。（20 代男性）
・初めて見たけど、勉強になる部分も多く、おもしろかった。（20 代女性）
・夏の夜にのんびり見るのにちょうどよかったです。（30 代男性）

・クラシック映画を見る機会は少ないので、今回の機会に見られて良かった。（30 代女性）
・このような古い名画という選択は良かった。（40 代男性）
・子供にも分かるような映画にして欲しい。（10 代女性）
・選んだ背景がよく分からなかった。（20 代男性）
・少し古かった。（40 代女性）
・見たことがなかったので良かったが、字幕が見づらくて必死だった。（40 代女性）

【上映形態（野外上映会）について良かった点、改善してほしいところ】
・ライトアップが綺麗で雰囲気がとても良かった。気候も丁度良く気持ち良く観賞ができた。（20 代女性）
・暗くなった後はアンケートの記入がしにくい点。（20 代男性）
・野外での映画ステキでした。やっぱりノイズが気になりました。（30 代男性）
・スクリーン周りには何もない方がいい。もう少し暗くなってからの方が見やすい。（40 代男性）
・字幕が下に出るので前の人の頭で見にくいときがあったので、可能ならスクリーンの位置をもう少し上にしてくれるとさらにいいと思います！（20 代女性）
・涼しくてよかった。ちょっと腰が痛いからクッション持ってくればよかったけど、貸出しされていたら嬉しいと思う。（20 代女性）
・とてもていねいに映画の説明をしてくれてよかった！でも、長すぎるので、後半はほとんど聞いていなかった。短くしてほしい！（20 代女性）
・上映までが長すぎる（40 代女性）・前説が長すぎ（50 代女性）・虫よけ（70 代女性）
・スクリーンがもう少し大きいと良い。アカペラグループは、あなた方自身ももっと楽しみながら歌うと聞く方ももっとゆかいだったと思う。（60 代女性）
・オードリー・ヘップバーンの説明の時にオードリー・ヘップバーンの写真や映像を流すと更にいいと思いました。（60 代女性）

【本イベントの感想、学生に企画して欲しいイベント等について】
・イルミネーションがきれいだった。普段見られない環境で映画を見られてよかった。（20 代男性）
・イルミネーションがアイキャッチになっていて、ふらっと訪れる人もいて、ふらっと映画を見られるってすてきだと思いました。続けてほしいです。（20 代女性）
・福井の PR ムービー、私は県外から最近ひっこしてきたばかりだったので、もっと何が何なのかちゃんと知りたかった。説明がなくてよく分からなかった。（20 代女性）

・野外映画祭なかなかないので良かった！！福井の活性化ということで、今日の野外映画祭の映画はめったに見ることができない物などだとたくさんくるのではないか。あとチラシを配ったり、周知をたくさんするともっとくると思う。無料ではもったいない。昔、石川県でカナザワ映画祭というイベントがあったので、あんなかんじでいろんな所でながしたりしても良いと思う。スポーツ観戦、怪談、落語なども興味があります。（30 代女性）
・30 年前に戻った気分です。ありがとうございました。（50 代男性）
・中央公園広場活用バリエーションを増やして欲しい。（60 代男性）

9.　全体を振り返って

野外上映会イベントを企画から運営まですべて自分たちで行うことで、一つのプロジェクトを成功させることの難しさを知り、一人一人が責任をもって主体的に行動することができた。また、その過程の中で、新たな気づきや反省点も見つけることができた。

準備段階で、来場者にアンケートと一緒に記念品として栞を配ったらよいのでは、という案を採用し、栞のデザインとしてオードリー・ヘップバーンのイラストと映画のタイトルを入れたものを考案した。しかし、「オードリー・ヘップバーン像はイラストとはいえ、もとになった写真が特定できるため危険であり、タイトルについても著作権が存在するため使わないほうが良い」という指摘があり、残念ながらこのデザインは使用しなかった。しかし、この著作権をめぐる問題を通して、パブリック・ドメイン（public domain）という著作権フリーの画像を使えば問題ない、という新たな知識を得ることができた。これは、今後ネット上の画像を使用したい時にも役に立つ情報だと思う。

反省点としては、後半の準備段階での仕事量が多くなってしまったことだ。ポスターの完成が遅れ、宣伝を開始するのも少し遅かった。記念品は結局作ることができず、30 分間プログラムの準備も足りなかった。さらに、当日には天候が悪かったこともあり、実施するかどうかの判断や、観客席ブルーシートの防水、備品やイルミネーションの運搬など、さまざまな問題に対処する必要があった。このような問題を想定し、初期段階からもっと余裕をもって準備を進められると良かったと思う。

しかし、結果としては今回の野外上映会を成功させることができたと感じる。昨年に引き続き会場にイルミネーションを設置し、オードリー・ヘップバーン主演の映画を選定したことで、昨年から一貫性のあるイベントにすることができたのではないだろうか。さらに、30 分間プログラムでアカペラサークルをゲストに迎えるなど新たな取り組みをすることで、より来場者を楽しませることができたと思う。また、野外で映画を観るという特別な体験を通して、映画の良さを感じてもらえたのではないだろうか。来年度以降もこのような野外上映会を開催し、地域の一つの恒例イベントとなり、映画を通した地域活性化につながると良いと考える。

10.　その他

THE 2ND
SUMMER NIGHT
THEATER
野外上映会＆イルミネーション
福井大学アカペラ
サークルふれんど
によるアカペラ演奏
もあります♪
会場：福井市中央公園
北側芝生広場
座席：芝生上のブルーシート
（折り畳み椅子やクッションの持ち込み可）
＊入場無料・飲食可
AUDREY HEPBURN
GEORGE PEPPARD
Breakfast at Tiffany's
AUDREY HEPBURN
WIDESCREEN DVD COLLECTION
©1961 by Paramount Pictures and Jurow-Shepherd Productions. All Rights Reserved.
上映作品：オードリー・ヘップバーン主演
『ティファニーで朝食を』（1961年）
2019
7/20 (sat)
19:00～ 22:00
＊悪天候の場合は７/２６（金）に順延
雨天順延等に関するお問い合わせ先：
Twitter又はInstagram: @night_theater2
：080-5711-8681
主催：福井大学国際地域学部
イルミネーション協力：福井大学工学研究科明石研究室
ホテルフジタ
県庁
◎福井市役所
福井城址大名町駅

ポスター①

THE 2ND
SUMMER NIGHT THEATER
OUTDOOR SCREENING & ILLUMINATION EVENT
Performance by the University of Fukui a cappella circle ふれんど
Place：福井市中央公園 /Central Park in Fukui City
(North-side lawn square)
We provide "leisure sheet" for you to spread on the lawn.
（You can bring a folding chair and cushion if you like.）
＊admission free・
bring your own food and drink
AUDREY HEPBURN
GEORGE PEPPARD
Breakfast at Tiffany's
The AUDREY HEPBURN WIDESCREEN DVD COLLECTION
©1961 by Paramount Pictures and Jurow-Shepherd Productions. All Rights Reserved.
Our film：Audrey Hepburn (leading actress)
Breakfast at Tiffany's（1961）
2019
7/20 (sat)
19:00～ 22:00
＊If the weather is bad, the screen party will be postponed until 7/26(Fri)
<For more information>
Twitter / Instagram: @night_theater2
(You can call this number: 080-5711-8681)
The host organization: Global and Community Studies of the University of Fukui
Illumination collaboration with Professor Akashi of the University of Fukui
Hotel Fujita
Here
Prefectural government
Fukui City Hall
Fukui joushi daimyoumachi Station

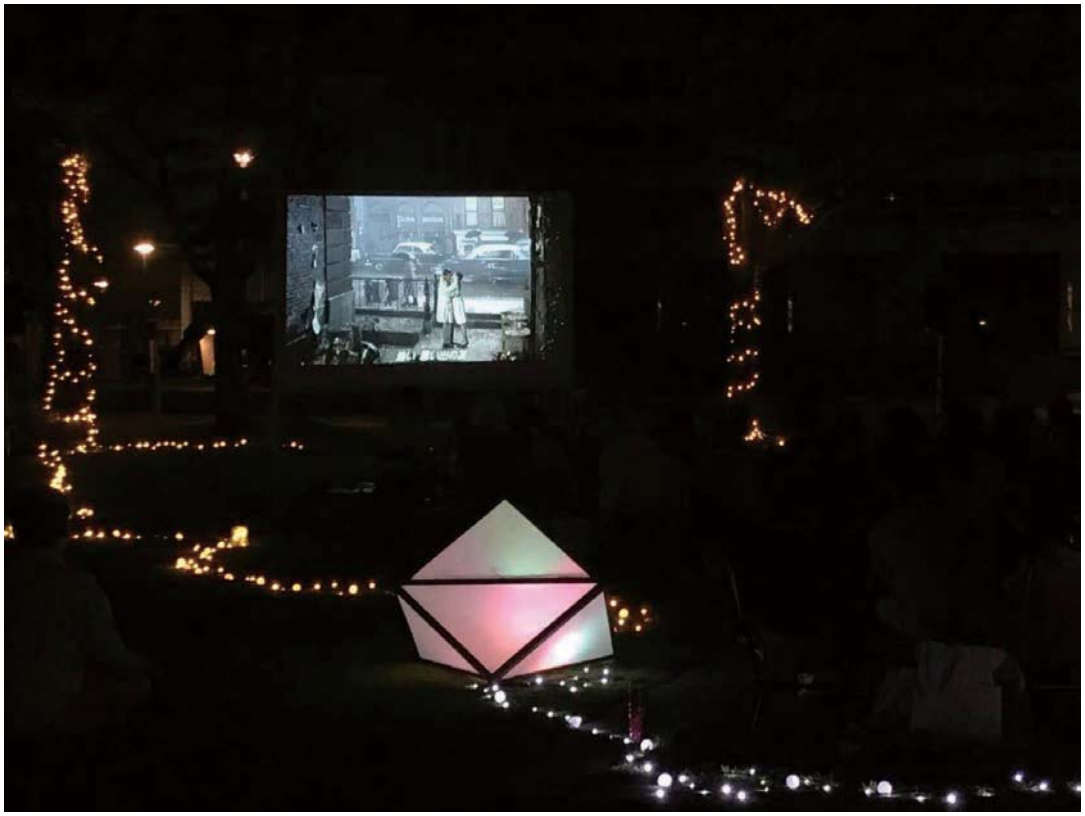
ポスター②

ポスター③

アカペラ演奏

上映中①

上映中②



上映中③

課題探求プロジェクトⅡ／ⅢB

（2年次後期／ 3年次後期：グローバルアプローチ）

国際地域学部　2年

粟田　皓大

蔵　まりな

新保　彩奈

高本　康平

中村　文香

西本　未翔

国際地域学部　3年

井上　静乃

木谷　佳乃子

勝山　東慈

国際地域学部　4年

柳浦　千春

目次

1. プロジェクトの趣旨
2. プロジェクトの概要
3. 映画上映会の詳細
4. 活動スケジュール
5. 上映作品・上映日・会場・調達機材等の選定について
6. 宣伝・広報活動について
7. 上映会当日の運営について
8. アンケート結果
9. 全体を振り返って
10. その他

映画自主上映会の企画・開催を通じた地域振興の取り組み
—福井県立図書館での映画上映会＆トークセッションの実施・上映作品『ウィンストン・チャーチル／ヒトラーから世界を救った男』—

1.　プロジェクトの趣旨

映画は娯楽的な商品であると同時に映像表現の芸術として、また文化的表現として人々の間で楽しまれてきた。ところが近年では、DVD やスマートフォンなどの新たな映像メディアの発展により、昭和 30 年代の映画館入場者数や映画館数の最高値達成後、映画館入場者数の減少傾向がみられるようになった。しかし今日では映画上映による地域振興など映画の利用方法が多様化し、新たな映画の楽しみ方が広がりつつあり、全国各地の地方自治体が映画上映会を通して地域住民との交流を図るケースが珍しくない。

今回のプロジェクトは、地域住民に馴染み深い福井県立図書館と連携して映画上映会を開催し、来場者の方々と学生とでトークセッションを行うことで、映画を通した多文化理解を深めるとともに地域住民との交流を図り、地域活性化への足掛かりをつかもうとする取り組みである。

2.　プロジェクトの概要

異文化交流やダイバーシティに関連して、自治体の生涯学習、商工観光関連等の部局や、関係団体の実施するイベントの企画運営にチームで加わり、体験的な学習や調査学習を行う課題探求プロジェクトの授業内容に沿って、今回は福井県立図書館と共同で映画上映会と学生によるトークセッションを行った。2020 年 2 月 9 日（日）に福井県立図書館で実施された映画上映会は、先に行った 2 つの野外上映会（『ローマの休日』『ティファニーで朝食を』）に引き続き、課題探求プロジェクトの授業における第 3 回目の映画上映会として企画された。開催日は気温が低く降雨日数の多い冬季であったため、野外上映会の開催は困難と判断した。そこで、今までの「その場の雰囲気を楽しむ」というスタンスの映画上映会とは異なり、年齢の高い層の集客が見込まれる福井県立図書館で話題性のある映画を上映して、その後に学生によるトークセッションを行い、地域の人々との交流を図った。

今年は戦後 75 年、かつ現在イギリスで EU 離脱が話題になっている。そのため、『ウィンストン・チャーチル／ヒトラーから世界を救った男』を上映することにした。映画上映後のトークセッションでは議論する内容を戦時中の内容と戦後のそれに大まかに二分し、前半は「なぜダイナモ作戦決行に踏み切ったのか」、「なぜドイツと和平条約を結ばなかったのか」の 2 つのトークテーマ、後半は賛否両論のあるチャーチルという人物に焦点を絞り、「なぜ 2017 年にチャーチルを肯定する映画が作られたのか」というトークテーマで来場者と学生によるトークセッションを行った。

イベント当日には約 70 名の来場客が訪れた。映画上映後のトークセッションは課題探求プロジェクト始まって以来初の試みであったが、学生側も多面的な学びを得られる有意義な時間となった。来年度以降も野外上映会だけでなく今回のようなトークセッションを含む映画上映会を開催すると、より地域振興を促すことができるのではないだろうか。

3. 映画上映会の詳細

- 開催日時： 2020 年 2 月 9 日（日）13:00 ～ 16:30
- 会場： 福井県立図書館
- 上映形態： 映画上映会＋学生によるトークセッション （入場料無料）
- 上映作品： 『ウィンストン・チャーチル／ヒトラーから世界を救った男』 （2017 年：125 分）
- 作品配給： MMC（株式会社ムービーマネジメントカンパニー）
- 上映会場： 福井県立図書館 多目的ホール
- 機材調達： 福井県立図書館

4. 活動スケジュール

活動日程

11 月	【授業（6 日）】オリエンテーション、上映作品リストの配布。 【個人】配布されたリストから上映したい作品を 1～3 作品選んでくる。 【授業（21 日）】学生と先生方がおのおの挙げた計 20 作品の中から候補作品を絞り込む。 【授業（28 日）】上映作品の検討。各候補作品の冒頭を鑑賞、4 作品に絞る。
12 月	【個人】4 作品のうち 1 作品を観てくる。 【授業（4 日）】上映作品の検討。『ダヴィンチコード』『日の名残り』『星の王子様』『ウィンストン・チャーチル』の 4 作品から 3 作品に絞る。 【授業（11 日）】上映作品の検討。『ダヴィンチコード』『星の王子様』『ウィンストン・チャーチル』から、2 作品に絞る。 【授業（18 日）】上映作品の決定。『星の王子様』『ウィンストン・チャーチル』のうち、動機付けのしやすさや図書館側からの意見、学生同士の話し合いを踏まえて、上映作品を『ウィンストン・チャーチル／ヒトラーから世界を救った男』に決定。イベントをシンポジウム形式にすることで話を進める。 【個人】パネリストまたは講演を依頼できるかどうか検討する。ポスター案の作成、イベントタイトル、シンポジウムテーマの検討。

1 月	【授業（8 日）】ポスターの修正・完成。シンポジウム内容の検討。講演を頼むことができないため、学生によるトークセッションに変更することに決定。 【授業（15 日）】トークセッションでの役割決定。トークセッションのテーマの検討。 【個人】宣伝・広報の対応 【授業（22 日）】福井県立図書館を訪問し、担当者と打ち合わせ。当日の会場・ステージや席の配置などを視察・確認。 【授業（29 日）】イベント当日の役割決定、トークセッションのテーマと内容の検討。
2 月	【個人】トークセッションの内容の決定、アンケートの作成。 【授業（5 日）】アンケートの修正・完成。映画を全員で鑑賞。トークセッションのリハーサル、トークセッションの内容の修正。 【上映会当日（9 日）】会場準備 → 本番 → 片付け 【個人】アンケート集計・分析、活動報告書の作成・提出。

～活動スケジュールの反省点～

今回の映画上映会の企画は第 4 クォーターから始まり、本番当日までの準備期間が短い中での活動となった。そのため上映作品の決定までに時間がかかった。これは初めにターゲット層を具体的に決めなかったことが要因で、ターゲット層を決めた上で上映作品の検討を行っていれば、もう少し早く上映作品が決まり、他の活動にも時間を割けていたであろう。授業時間外での学生同士の集まりも少なかったため、授業中に話し合いを進めることが多かった。LINE でのやり取りはあったものの、最終的に授業中にほとんどの事を決定していたため、もっと授業時間外で集まっていれば授業時間を別の事に使えていたであろう。また、宣伝・広報についても改善できる点がある。今回の映画は戦争もので、20～60 代の大人だけでなく年配の方も興味があるものであった。そうした人たちがよく見るのはインターネットよりも新聞や掲示板等だと思うので、結果論にはなるが、新聞や車内広告などの宣伝方法はとても効果的であったと思う。しかし、インターネットでの宣伝は早い時期から行うことが可能であったので、もっと積極的に取り組むべきであった。トークセッションについても、戦争が話題になっているということもあり、年代によってその話題に対して感じることが違うため、もっと下調べすべきであったと感じた。テーマの準備期間も短く、チャーチル以外のことについて詳細に調べられなかったということもあるが、戦争関連のことを扱うには私たちの考えていることが来場者の方々に“軽い”と思われても仕方がないと感じた。

これらの反省点を踏まえると、来年度は上映作品決定までの時間短縮、授業時間外活動と授業の平行、適切な宣伝・広報、開催するイベントに関する下調べをしっかりして

おく必要があり、そうすることで活動がよりスムーズに進み、イベントの内容もより充実すると思われる。

5.　上映作品・上映日・会場・調達機材等の選定について

①　活動（検討）内容

我々が上映作品を選ぶ際に注意したことは、図書館と共同で行うイベントであるため、図書館に蔵書されているような文学作品が映画化されたものであること、映画自体が面白いこと、そしてなぜ今その映画を上映するのかといったことである。数々の候補が上がったけれども、最終的には「ウィンストン・チャーチル／ヒトラーから世界を救った男」に決定した。ウィンストン・チャーチルに関する映画を選んだ理由は、イギリスの元首相であるウィンストン・チャーチルは、作家でもあり本を出版したことがあるからである。さらにウィンストン・チャーチルに関する図書も多く出ている。よって、図書館との共催でこの映画を上映することはおかしくないと考えた。映画自体の面白さについては、歴史やチャーチルのことを知らなくても面白く、歴史を知っている人も楽しめる作品であるという意見でまとまったのでこの映画に決めた。さらにこの映画を選んだもう一つの理由は、現在のイギリスが EU 離脱をめぐる問題で揺れ動いており、チャーチルのような意志の堅いリーダーが求められているのではないかという点に着目し、チャーチルに触れながら、現在のイギリスについてのトークセッションが関連企画で行えると考えたからである。映画は個人の趣味嗜好で好みがはっきりと分かれてしまうため、上映作品を決定するのに相当な時間を費やす結果となってしまった。イベントでは、映画の上映と学生によるトークセッションを行うことにした。上映作品の決定後、映画に関連するイベントを考える必要があり、いくつかの候補が挙げられた。演説家としても有名であったチャーチルの名言紹介、シンポジウムなどである。当初は来場者と一緒にイベントを盛り上げる企画が良いと考えていたので、シンポジウムを検討していた。しかしシンポジウムというのは、専門家がパネラーとして意見を述べ、それについての議論を行うものである。我々がこの企画を決定した時には、イベント当日まであまり日数がなく、専門家にアポイントを取る時間がなかった。それにより、シンポジウムではないが討論会はしたいという考えから、折衷案として学生によるトークセッションという形でこの企画を行うことにした。我々が上映した映画は専門的知識があればより分かりやすく楽しめる作品であったため、上映前に 5 分程度の映画紹介を行った。関連企画を考えるのはもちろん、映画上映会である以上、映画をより楽しんでもらうための工夫が必要だと感じたからである。上映日は 2 月の第一週または、第二週の土日のどちらかにすることになり、最終的には第二週の日曜日の 2 月 9 日に決定した。なぜなら日曜日は休日なので集客が見込めると考えたからである。さらに、2 月の第一週は学期末テスト期間であったため、学生はこの映画上映会の準備に集中できないという事情もあった。上映会

場は、福井県立図書館と共催であるため福井県立図書館となった。DVD は自主上映サポート機関である MMC から調達し、上映機材は図書館が所有している機材を利用させていただいた。

② 得られた知識・経験

自主上映を行う時に業務用 DVD を借りられる会社として、映画センター全国連絡会議：福井県映画センター、Cinemo、Uplink、MMC などがあることを初めて知ったので、自主上映会を今後行う際の参考になると思った。多数決や消去法で上映作品を選定して絞っていったことから、話し合いでなかなか物事が決まらなかった時に、多数決や消去法であっさりと決めてしまうのも良い判断であると思った。

作品を選定する際に最も難しかったのは、「なぜ今その作品を上映するか」の動機付けであった。それぞれの候補作品にキーワードが存在し、どの切り口で上映動機を引き出すかが難しかった。映画そのもの、史実、ターゲット層、どの切り口かで上映会に相応しい作品は変わってくる。したがって、まずターゲットを決めてしまうのが良いと考える。そのほうが来場者のニーズをつかみやすいからである。

イベント内容を検討するときには、来場者と一緒に場が盛り上がるような企画が良いということ、企画を早く決定することが必要だということが分かった。あくまでこちらが主体的に動くが、来場者参加型にすることにより来場者を飽きさせないようにすることができる。

この過程で一番学びが大きかったのは、やはりトークセッションのテーマ選定である。やみくもに自分たちが話したいテーマをたてるのでは、上映作品との関連性が見いだせずちぐはぐなトークセッションになりかねないため、しっかりと関連性と妥当性のあるテーマを選ぶ必要があった。テーマ選定ではもちろん学生全員で話し合ったが、学生自身チャーチルやイギリスという国、または第二次世界大戦 について疎いこともあり、なかなかテーマが決められずにいた。そんな中、何とか自分たちにも関連があることを調べて知識をつけやすいテーマを選ぼうとした。戦時中のテーマに関しては、細かい作戦や戦術の話ではなく、史実の理由に迫るような大局的なテーマ設定ができたと思われる。

③ 反省点（今後の課題）

作品選定過程でうまくいかなかったと感じたのは、作品決定までに時間を要しすぎたことである。ニーズに応えるための作品選びであるため時間をかけてもよいが、もう少しスムーズに決めることができたのかもしれないと感じた。原因として考えられるのは、推薦作品を持ち寄る前にターゲットを決めなかったことである。誰のために開く上映会かをしっかり定めていなかったがために、各々の推薦作品のジャンルがバラエティーに富みすぎ、結果として絞り込むのに時間がかかってしまった。詳細事項の決定前には前

提条件を決めておくことが重要であると理解した。

トークセッションのテーマを決める時に、学生からアイデアが出にくかったことが反省点であり、改善点でもある。（全員が映画の舞台になった時代に興味を持っているとは限らないので、仕方がない部分もあると思う。）　教員の方々から沢山の参考になる意見を頂戴して、それを整理して最終的にテーマ決定に至ったが、本来学生によるイベントなのだから、ここはもう少し学生側から意見やアイデアがあってもよかったのではないかと思った。戦争分野に興味がない学生からすれば、興味がない、全然知らない分野でアイデアを出すというのは酷かもしれないので、上映作品を決める際には、なるべく学生全体の興味を引きつけやすい作品を選んだほうが良かったのかもしれないとも思う。

6.　宣伝・広報活動について

①　活動（検討）内容

まずは、今回実際に行った宣伝・広報活動について触れたいと思う。我々が使用した宣伝媒体は 5 種で、新聞・News & Topics（福井大学の報道機関向け情報誌）・「ふーぽ」（福井県イベント情報キュレーションサイト）・えちぜん鉄道車内中吊り広告・ポスターでの宣伝である。今回は、前回の野外上映会で積極的に活用されていた SNS での宣伝活動は特に行わなかった。なぜなら、イベントのターゲットとしている客層を 40～70 代に設定したため、SNS を始めとするインターネット上の宣伝は効果があまり見込めないと考えたからである。そのため今回は紙媒体を中心とした宣伝・広報活動を展開した。

次に、各宣伝媒体で具体的にどのような活動を行ったかを紹介する。まずは新聞について。新聞に記事を寄稿、または取材を受けて記事にしていただくことによってイベントを告知していくのは、活動当初から決まっていたが、実際に記事が形になったのは 1 月の下旬であった。取材は勝山が対応し、形式としては電話での取材であった。次に、「ふーぽ」での宣伝について。これは福井新聞が運営する福井のイベント・観光スポット・グルメスポットを紹介するサイトである。ネットでの申請だけで誰でも情報を掲載できるので（承認制）、試験的に宣伝に使ってみたところ、イベントの概略を載せることができるが、誰でも気軽に掲載できるが故にたくさんの情報に埋もれやすいという性質がわかった。プラットフォームの性質上、他に掲載されているイベントと差別化することが難しく、これだけで集客を狙うのは厳しいというのが正直な印象である。次はえちぜん鉄道車内中吊り広告について。本学部企画の上映会としては初めての試みとなる中吊り広告なので、掲出に至るまでのプロセスでは若干の戸惑いはあったが、無事掲出することはできた。掲出期間はイベント開催日 10 日前からの 10 日間で、値段は 25,000 円ほどであった。注意点としては、中吊り広告用に横サイズでのポスターが必要になるため、予め縦だけでなく横向きのポスターも作っておくと迅速に対応できるという点が

挙げられる。最後はポスターでの宣伝について。ポスターは前回に引き続き学生自らがデザインしたものを使った。今回デザインが完成したのは、年が明けてからになり、イベント開催のちょうど 1 ヶ月ほど前であった。ポスター掲示場所としては、福井大学構内、イベント会場の福井県立図書館、国際交流会館、学生のバイト先など。他にも福井県立図書館の近くにある生活学習館にも掲示をお願いしようとしたが、申請期間が過ぎていたため掲示には至らなかった。

② 得られた知識・経験

今回の宣伝・広報活動から得られた知見は 2 点ある。一つはポスター制作に関してで、もう一つはポスターの掲示に関する点である。

まずはポスター制作に関して。今回、映画供給会社から使用を許可された写真素材が縦長の形状だったため、ポスターのデザインも縦を意識したものにした。それにより、素材写真とポスター全体が違和感なく融合し、自然なレイアウトでポスターを仕上げることができた。また、「ウィンストン・チャーチル／ヒトラーから世界を救った男」という映画自体がシリアスな雰囲気をまとっているため、ポスターの基本カラーを黒に設定し、映画の雰囲気を損なわないポスターに仕上げた。こうすることでどのような映画なのかをポスター全体からも感じることができていたと思う。

もう一つのポスター掲示について。今回、ポスター掲示場所を選定する際、「誰にそのポスターを見てほしいのか」を明確にしてから掲示候補場所を考えた。ここでは、単に人通りが多そうだからという理由だけで掲示場所を考えるのではなく、いかに狙っている層にポスターの情報を届けるかを意識した。その結果アンケート結果からもわかるように、ポスター・チラシをみてイベントを知った人が多かった。

③ 反省点（今後の課題）

今回の宣伝広報活動において挙げるべき反省点は、えちぜん鉄道車内中吊り広告と「ふーぽ」での宣伝についてである。まず、えちぜん鉄道車内中吊り広告についてだが、これは効果が低かった。アンケート結果をみてみると、中吊り広告をみてイベントを知った人はいないに等しく、行った労力の割にほとんど報われない結果となってしまった。原因としては、掲出する期間が短かったのと、掲出開始が遅かったことが挙げられる。イベントの 10 日前から掲出したのでは、それを見た人が興味を持ってくれてもすでにスケジュールが埋まっている可能性も高い。少なくともイベント当日から 1 ヶ月ほど前には掲出を開始して、より多くの人の目にポスターを触れさせ、スケジュールに組み込んでもらわないといけないと感じた。

また、ほぼ唯一のインターネット上での宣伝となった「ふーぽ」を活用した宣伝活動だが、これも効果はあまりなかったといえる。多くの人の目に触れるかもしれないインターネット上に情報を上げてみたものの、あまりに多くの他の記事に埋もれてしまい、

このイベントの情報が全く目立たないことになってしまった。新しいイベント情報が入るたびに、本イベント情報は後ろに追いやられていき、2ページ目、3ページ目に移動して行くたびに発見されづらくなってしまった。次回からは情報の波に埋もれにくい手段で発信するのが得策だと思う。例えば自身の発信プラットフォームを構築するなどである。

7. 上映会当日の運営について

当日に向けては、アンケート作成者1名、映画紹介者1名、司会者1名、パネラー8名、書記1名、マイク係（前半と後半で担当者交代）という役割分担をした。当日はイベント開始時刻の1時間前に現地集合し、映画がしっかりと投影されるかなどの機材チェックをしてから、座席を配置したり、アンケート用紙に福井県立図書館の広告チラシを加えて各席に置いたりする作業などを手分けして行った。イベント開始時刻が近づくと、観客の方々が続々とやってきて、アンケートに目を通して下さっていた。

まず、最大の反省点は、席同士が近すぎて後ろの方が映画を見るのにとても苦労されていたという点である。実際、映画館と比べるとスクリーンは二回りほど小さく、吹き替えなしの英語で上映されていたため、字幕を見ないと映画の流れはわからなかったはずである。肝心の字幕はスクリーンの一番下に出てくるため、それをみようと首を伸ばしていたり、自ら椅子を持って後ろに移動したりする方もいらした。次回、同様のイベントを行う際には、実際に座ってみて映画を見る際に支障がないかを確認するべきである。

映画自体の評判はとても良かった。そのあとのトークセッションまで20分ほど休憩時間を設けたために、その間に帰ってしまう方も少なくなかった。しかしアンケートはしっかりと記入して帰って下さったため、その点は良かったと思う。後半のトークセッションではパネラーが8人いた。パネラーがステージに登壇し、テーマに応じた映画に関する自分の考えを述べた後に、参加者との質疑応答を行った。時には話し合いが予想以上に白熱したために、参加者から様々な観点からの意見が飛び交った時には、うまく受け答えができなかった。映画制作に到るまでの経緯を調べて説明したが、さらに詳しいことまで質問された時に、準備不足で曖昧にしか答えられなかった。質問された内容に対しても、知識不足のために的を射た答えにならず誤魔化すような回答になってしまったことは残念であった。だが、各自パネラーの役割はしっかりと果たし、自分たちができる精一杯をやり尽くしたと思う。観客の方にもそれは伝わっていたようで、イベント終了時に多くの方が「お疲れ様」と声をかけて下さった。

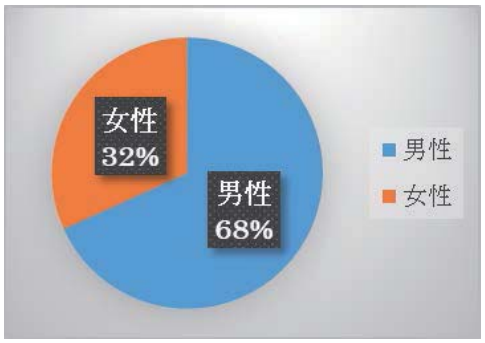
イベント前は、当日どのようなディスカッションになるのか検討もつかないまま企画運営を進めていた。日本人がシャイであるとか、来場客があまり話してくれないか

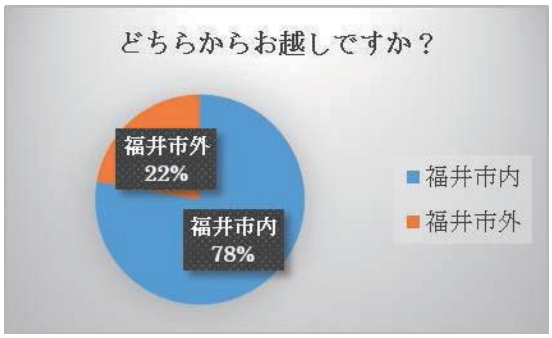
もしれないとか、知識不足かもしれないとか、さまざまな消極的想像ばかり膨らませていた。しかしながら実際は、来場客の方が我々よりも詳しく現代の情勢を理解しておられ、私達自身の知識・勉強不足に気づかされた。自分よりも一回りも二回りも違う年齢の方々とあれほど面と向かって真剣に戦争時代のことを話し合う機会はそうそうないことなので、初めての経験でとまどってしまったけれども、それでも自分のベストを尽くせたことはこれからの自信につながっていくと思う。自分の価値観で物事を見すぎていたことを学ぶことができた。

8. アンケート結果

（1） 性別を教えて下さい

男性 43 人 女性 20 人 （来場者約 70 人）





（2） どちらからお越しですか

福井市内 49 人 福井市外 14 人

（男性 福井市内 32 人 福井市外 11 人）

（女性 福井市内 17 人 福井市外 3 人）

福井市外［越前市 5 人 坂井市 3 人 鯖江市 4 人 大野市 1 人］

男性 福井市外 ［越前市 4 人 坂井市 1 人 鯖江市 4 人 大野市 1 人］

女性 福井市外 ［越前市 1 人 坂井市 2 人］

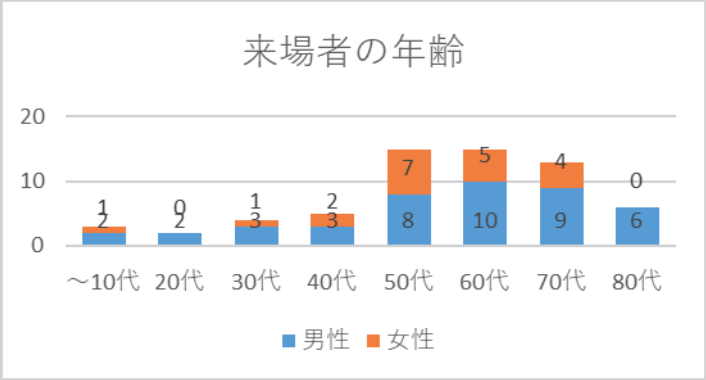
（3） 年齢を教えて下さい

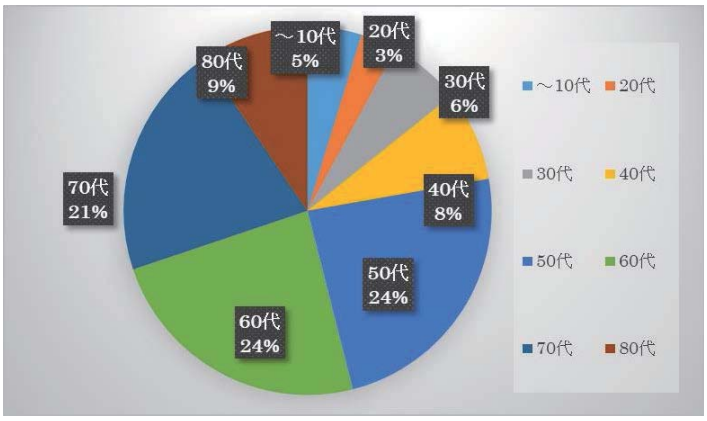
10 代 3 人（男性 2 人 女性 1 人） 20 代 2 人（男性 2 人 女性 0 人）

30 代 4 人（男性 3 人 女性 1 人） 40 代 5 人（男性 3 人 女性 2 人）

50 代 15 人(男性 8 人 女性 7 人） 60 代 15 人(男性 10 人 女性 5 人）

70 代 13 人（男性 9 人 女性 4 人） 80 代 6 人（男性 6 人 女性 0 人）





→10 代から 40 代までの来場者よりも、50 代から 80 代までの来場者が多かった。
来場者の中には 10 代以下の方もおり、幅広い年齢層の方々に来場していただいた。

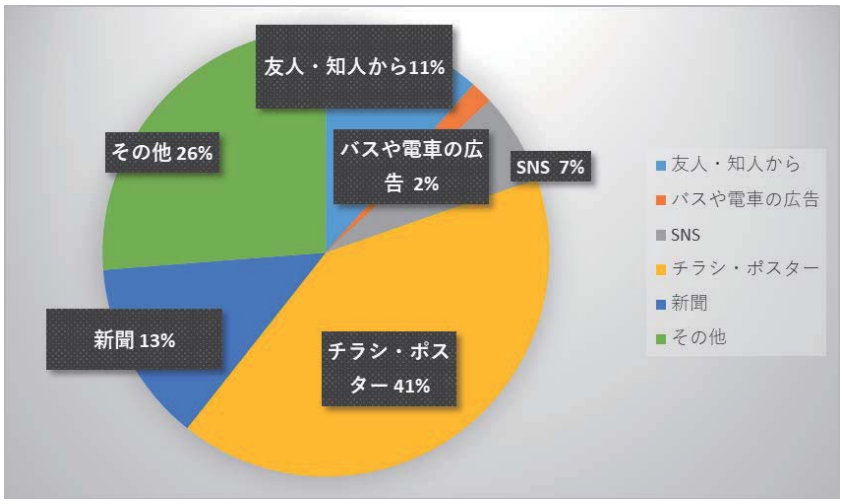
（4） ご職業を教えて下さい

	男性	女性	
会社員	10	3	13
自営業	4	1	5
自由業	1	0	1
教職員	2	1	3
公務員	3	1	4
学生・生徒	3	1	4
専業主婦	0	5	5
パート・アルバイト	2	4	6
無職	16	2	18
その他	1	2	3
無回答	1	0	1
	43	20	63

その他女性→団体職員

（5）　どのようにして本イベントをお知りになりましたか

	男性	女性	
友人・知人から	6	1	7
バスや電車の広告	1	0	1
SNS	3	1	4
チラシ・ポスター	18	7	25
新聞	2	6	8
その他	11	5	16



→チラシ・ポスターでこのイベントを知った方が４割いた。ポスターやチラシは効果があると思われる。県立図書館館内でこのイベントを知った方も多く、ホール内に掲示されていた大きなポスターが効果的であったのではないかと思われる。

（6）　なぜこのイベントに参加しようと思われましたか

	男性	女性
『ウィンストン・チャーチル/ヒトラーから世界を救った男』を見たかったから	24	18
主演のゲイリー・オールドマンに惹かれたから	5	1
映画が好きだから	16	8
トークセッションに参加してみたかったから	4	2
図書館を利用する際に立ち寄ってみようと思ったから	16	4
その他	5	1

男性その他					
精神障害者の偉人としてのチャーチルに興味があった					
おもしろそうだったから					
ゲイリー・オールドマンのメーキング					
メイキャップアーティストに日本人がいるから					
チャーチルの好んだボルドーワインを知りたかった					
女性その他					
参加というよりどのようなトークセッションなのか興味があったため					
国際地域学部の学生さんやその取り組みに興味があったため					

（7）　本イベントの満足度（5 が最も高い満足度）

	男性	女性
1	1	0
2	2	0
3	5	4
4	10	6
5	12	8
無回答	13	2

（8）　上映作品の選定について

良かった点

・良かった。ストーリーがわかりやすく場面ごとに迫力がある。（60 代男性）
・今の憲法改定問題に通じ良かった（70 代男性）
・戦争と平和について考えさせられる素晴らしい作品でした。また、どこまで史実か分かりませんが、チャーチルの人間的側面も見ることができ良かったです（20 代男性）
・国際情勢が混沌としている現在、タイムリー（70 代男性）
・「今、なぜチャーチルか」トランプ氏、ジョンソン氏等、「異能な」リーダーが登場する中、リーダーとは、と考える上で良い作品だなと思いました（50 代女性）

ご意見・ご要望

・知識不足のため、この作品の現代的意義が分からなかった（40 代男性）
・ナチスドイツ（悪）民意を呈して、独の侵攻に先攻。チャーチルが徹底抗戦を決めるというのは美しい話だが真実は如何？勝者の歴史は熟考が必要。美化されがち。この映画の訴求点は何なのか（人間チャーチルなのか）（50 代男性）
・字幕の映画だったので、椅子を交互に配置し、字幕を見やすくしてくださるとよかったです。

（9）　学生によるトークセッションについて

良かった点

・良く学んでいると思いました（60 代男性）
・盛り上がって良かったと思います（40 代男性）
・チャーチルの深掘りで、この映画の意義が、理解が深まりました。単なる伝記ではなく、知って欲しい内容もあったのだと思いました（50 代男性）
・同じ映画を見ても、人によって捉え方や考え方が異なること。違う視点から映画の内容を振り返ることができとても良かった（40 代女性）
・学生さんの考えを聞けた事に満足しました。自分の考えを発表する機会をこれからも増やして頂きたい（50 代女性）

ご意見・ご要望

・なぜセッションテーマがダイナモ作戦、和平交渉についてなのか。映画の趣旨からすれば「国家の危機において求められるリーダー、人間像とする方が適当ではなかったか（50 代男性）
・テーマがある程度決められていますが、テーマについては、（参加者に発言を求めるのであれば）別に特定のものに絞る必要はないのではないかと思いました（カオスにならない程度に…）。（20 代男性）
・ＭＣが弱くてグダグダになっていた。オーディエンスを野放しになっていたので、何の話をしているか分からない人もいた。女の子の感想棒読みが頭に入らなかった（30 代男性）
・事前に、もっとフロアで出てくる意見についてしっかり予測、分析すべき（60 代男性）
・ＥＵの問題についてもっと詳しく発表して欲しかった。労働党の党首がＥＵ残留だった理由を知りたかった（40 代男性）
・最初の発言は準備しておられたのでしょうから、もう少し聴衆に話しかけるように…。（原稿を読むのではなく）いろんな参加者の話を引き出すのは、難しかったでしょう。良い経験になったことでしょう。これからも広い視野を持てるように、頑張って下さい（60 代女性）

（１０）本イベントの感想・今後学生に企画してほしいイベント

・国際地域学部はどんな事を学ぶのか知りません。今、コロナウイルスが発生し世界の問題が沢山あり、その状況で日本は何をしなければいけないのか教えて欲しい（60 代男性）
・再度似たようなイベントをして欲しい（20 代男性）
・映画、学べる歴史映画また見たいです。ベートーベンとか（音楽家）イヴサンロー

ランとか（ファッションデザイナー）（50 代男性）
・また、良い映画の上映（50 代男性）
・参加者による歴史論争もなかなか面白いと思いました。今後、こうした歴史的なテーマを定め、討論するのも良いかもしれません（20 代男性）
・映画を上映して話し合うというのはいいと思う（50 代男性）
・在日外国人たちとの交流が出来るイベントをお願いします（40 代男性）
・同じ言葉をイスラムもチャーチルも言っている。今も昔も言っている。争いはなくならないのか。グレタのような理念・理想を訴えるのは無駄？無念？不可？戦争はやっぱりあかんよねえ。でも滅びてもいいか？（70 代女性）
・御自分たちが興味の持てるものが良いのでは。企画する側にやりたい熱がないと伝わらないと思います。耳の痛い意見も少し取り入れながらやられた方がよいイベントができるのでは？（60 代女性）
・映画という視覚からのアプローチは、講演会とは違う気持ちの高まりがあって良かった（50 代女性）
・勉強している学生さんの考えを聞ける場を希望します。大人向け、子供向けの場を増やして下さると嬉しく思います。これからも頑張って下さい！！応援しています！！（50 代女性）
・映画を観るだけでなく、それを踏まえて意見を聞くことができて良かったです（50 代女性）
・トークセッションは意見を発表する方も沢山あってとっても良かったです。参考になり楽しかったです。今日は素晴らしい映画を見せていただきありがとうございました（70 代女性）

（１１）次回もこのようなイベントがあれば参加しようと思いますか

	男性	女性	
はい	25	17	42
いいえ	0	0	0
わからない	3	1	4
無回答	15	2	17
	43	20	63

女性				
時間の都合がつき興味がもてる題材でしたらぜひ				

9.　全体を振り返って

今回の課題探求プロジェクトでは、福井県立図書館での映画上映会と、その内容に関連する学生によるトークセッションを行った。上映作品は「ウィンストン・チャーチル／ヒトラーから世界を救った男」である。この映画は、授業中に学生がそれぞれの好みの映画を提案し、その中から決定された作品である。上映作品を決定するプロセスでは、映画上映に関する権利やお金の仕組み、どの客層を想定してどの映画を選択するかを考えて提案する能力が養われたように感じる。これらの上映の権利などについての知識はこの授業を受講する前には持ち合わせておらず、こういったイベントを主催する側に立つのもあまりない経験であったため、とても新鮮に感じられた。これらのプロセスを通しての反省点は、上映作品を決定するのに時間がかかってしまい、広報活動や、トークセッションのテーマを練ったり、リハーサルを行ったりする時間が短くなってしまったことである。オンラインでの広告など、他にも広告の方法は沢山あったにもかかわらず、広報に回す時間が短くなったせいで、多くの宣伝方法を用いることが出来ず、同年代の来場者が少なかったように感じた。よって次回以降は、もっと効率的に時間配分をして動いていく必要があると感じた。

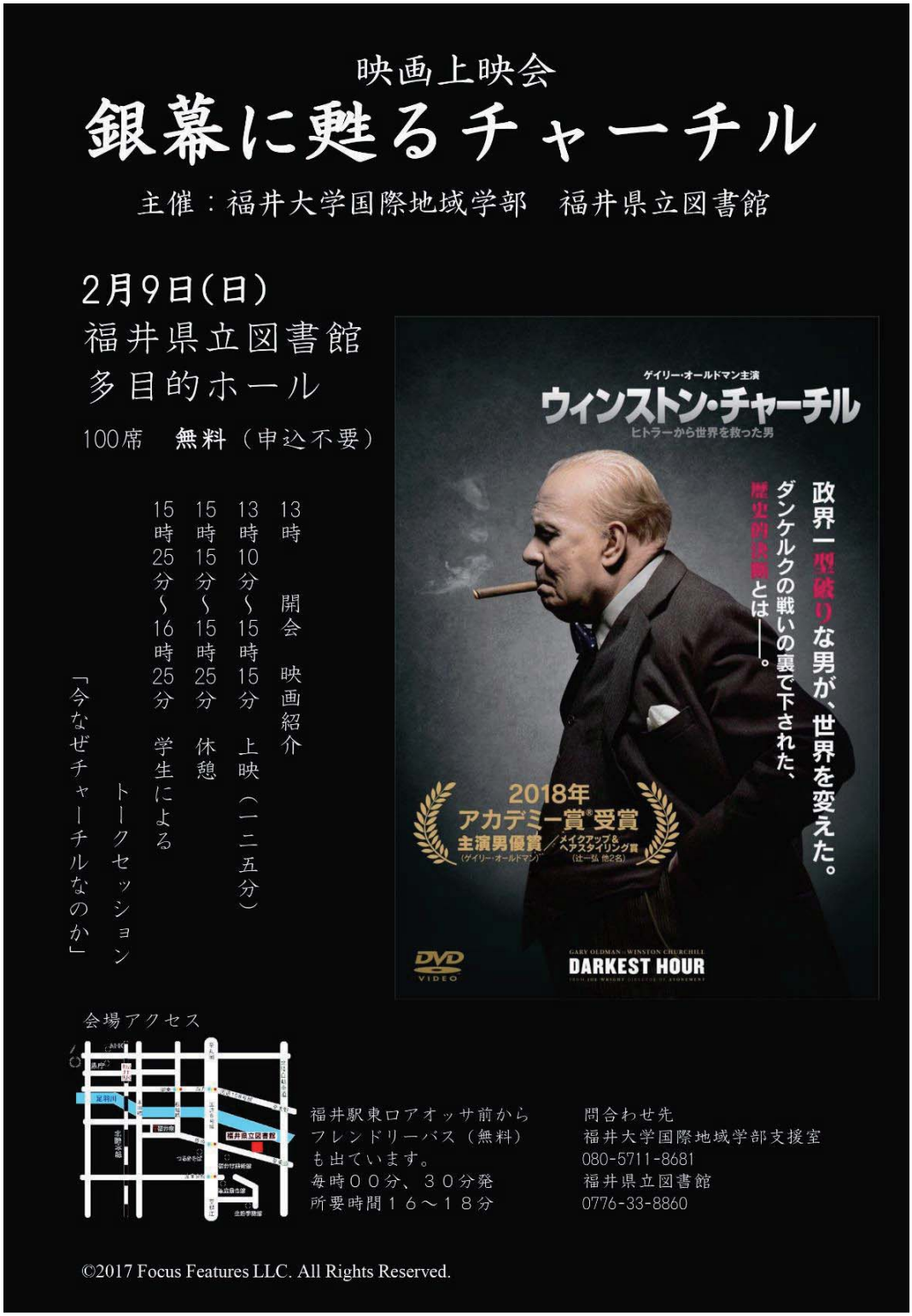
今回のイベント内容は映画の背景知識に関する簡単なプレゼンテーション、映画上映とトークセッションであったが、これ以外に別の案がいくつか挙げられていた。シンポジウムやパネルを用いたディスカッションなどである。しかし、映画がチャーチルに焦点を当てた作品であり、予測される来場者も高齢で、映画の中の時代設定である 1940 年代の戦争に詳しい方や、その映画に自分の意見を持っている方々も一定数来場されるのではないか、と事前に想定していた。したがって、学生とのトークセッションが上映後のイベントとしては適切であると考え、上映後に学生のうち何人かが壇上に上がり、決められたテーマについて来場者とトークセッションを行う、という形にした。また、来場者の中には 1940 年代にあまり詳しくない方々もいるだろうと予想して、そうした方々にも映画を楽しんでもらうために上映前に映画の背景知識を簡単に説明することにした。これらのイベント内容に対する反省点は特になく、予想される来場者の層などを適切に捉えていたため、全体としてはよいイベントになったと感じている。やはり、イベントの内容を決めるには、来場者のニーズを予測し、それをどう満たすかがイベント成功のカギになってくるのだ、と感じた。

今回のイベントに関する宣伝活動で実行したのは、福井大学広報課のインタビュー、福井大学広報課の Facebook と Twitter にイベント情報を掲載、市内を走る電車の中に車内広告を掲載してもらうことである。これらのうち自分が関わったのは、広報課のインタビューを受けて、その内容を記事として雑誌に掲載していただくことであった。実際のインタビューで聞かれたことは、なぜこの映画を上映しようと決めたのか、トークセッションで話し合われるテーマは何か、であった。この質問をされた時に、正直なと

ころすぐには答えられなかった。この映画の選定は完全に多数決によるものであったし、トークセッションのテーマもその時は全く決まっていなかったからである。かろうじてちょうどその前にイギリスに関する EU 事情について少し調べていたので、何とか答えることができた。だが、その時は EU 関連のことしか話せなかったので、トークセッションのテーマの一つである、過去のことについてはあまり話すことができなかった。また電車の車内広告に関しては、勝山さんに任せっきりで、ほかの人たちは何も動くことが出来なかったので、もっと分担してそれぞれ協力できたのではないかと感じた。しかし、そんな広告の方法があったのだと新たな気づきにもなった。

イベント当日について、当日は上映後のトークセッションに参加することが主な役割であった。トークセッションをすることで得られたものは、トークセッションを盛り上げるためには、自分の主張に穴を作っておくことも一つの手段であるということである。トークセッションの参加者は、自分の意見を主張し、相手を論破することが好きな人が多いように感じるため、盛り上がらない時にはちょっと抜けたことを言ってみるのも一つの手だと思った。しかし、今回は予想以上に多くの方々が自分の意見を主張され、学生にも意見をかぶせてきて下さったので、学生にとっても来場者にとっても非常に有意義なトークセッションになったと感じた。ただ一つ後悔が残るのは、トークセッションの後半で、一人の年配の男性が学生一人ひとりにこの映画に何を感じたかを質問してくださった場面で、僕は正直この映画をただのエンターテインメントの一つとして視聴して面白かったという感想しかなかったのだが、それを正直に言わずに、だらだらと見栄を張って話してしまったことである。そこで正直に言って、すっきりしておけばよかったと感じた。また上映中に思ったことだが、会場で後方座席に座っておられた来場者が座席を移動しておられたので、字幕が見えづらいのだと思った。音声を日本語吹き替えにすればよかったのではないかと感じた。

10.　その他


映画上映会
銀幕に甦るチャーチル
主催：福井大学国際地域学部　福井県立図書館
2月9日(日)
福井県立図書館
多目的ホール
100席　無料（申込不要）
13時　開会　映画紹介
13時10分～15時15分　上映（一二五分）
15時15分～15時25分　休憩
15時25分～16時25分　学生による
トークセッション
「今なぜチャーチルなのか」
ゲイリー・オールドマン主演
ウィンストン・チャーチル
ヒトラーから世界を救った男
政界一型破りな男が、世界を変えた。
ダンケルクの戦いの裏で下された、
歴史的決断とは――。
2018年
アカデミー賞®受賞
主演男優賞
メイクアップ&ヘアスタイリング賞
DVD
DARKEST HOUR
会場アクセス
福井駅東口アオッサ前から
フレンドリーバス（無料）
も出ています。
毎時００分、３０分発
所要時間１６～１８分
問合わせ先
福井大学国際地域学部支援室
080-5711-8681
福井県立図書館
0776-33-8860
©2017 Focus Features LLC. All Rights Reserved.

ポスター

えちぜん鉄道車内中吊り広告

上映前プレゼンテーション

学生によるトークセッションの様子

福井県立図書館内に設けられたチャーチルに関する図書のコーナー

おわりに

本冊子は、国際地域学部グローバルアプローチの「課題探究プロジェクト」（PBL）の 2019 年度活動成果報告書となります。この中には「課題探求プロジェクトⅠ・Ⅱ」、「課題探求プロジェクトⅢA」（「課題探求プロジェクトⅢC」を含む）、そして「課題探求プロジェクトⅢB」の報告がまとめられています。

グローバルアプローチの「課題探究プロジェクト」（PBL）には、2 つのクラスがあり、学生はそのどちらかを選択することになっています。この 2 つは、社会的な視点を持つクラスと、文化的な視点を持つクラスに範疇分けできるかと思います。このクラスは後者で、外国の文化、文学、言語等を専門にする教員が学生の主体的な学びを助言する役割を担っています。具体的には、福井県国際交流会館主催のフェスティバルでの実習と映画の自主上映（野外上映会と県立図書館での上映会）が、本年度の活動の内容になりますが、どれも国際的な視点を内包する地域振興への取り組みと言えるでしょう。国際交流会館での実習では、地域の様々な人々、外国人との交流を通じて、所謂グローカリズムを身をもって体験し、何らかの新たな知見を得ることができたことと思います。自主上映の取り組みでは、企画立案、イベントの広報、そして実施といった流れを通じて、県立図書館、市役所、新聞社など様々な社会の公的機関との関わりを経験し、新たな視座を得るとともに、一つのイベントをやり遂げるという大きな喜びを感じることができたのではないかと思います。そして、どの PBL においても、地域の文化的振興のささやかな一助を担うことができたのではないかと思います。もちろん、学生の報告にあるように、様々な反省点もあり、うまくいかなかった部分も含めて、本年度の PBL の成果と言えるのだと思います。

最後になりましたが、この PBL に関して様々な形で、ご協力、ご支援頂きました関係諸機関、個人の方々に厚く御礼申し上げます。

課題探求プロジェクト（Ⅰ・Ⅱ・ⅢA・ⅢB・ⅢC）
グローバルアプローチ活動成果報告書
（2019 年 4 月～2020 年 2 月）
発行　2020 年 3 月 31 日
編集・発行者　福井大学国際地域学部
〒910-8507　福井市文京 3－9－1
E-mail: s-gcssien@ad.u-fukui.ac.jp